拾遺都名所圖會

平安城

名所圖會拾遺卷
山城州之都邑山
川之美神祠佛樓
之勝侖毫末於短
簡籠千里於寸陰

所謂能居然而辨
八方者乎哉夫徒
有膳膳情之實無濟膳
之具者唯當叩以
遊之

天明丁未九月

鷲尾大納言藤原隆建卿

櫻寧主人

凡例

一此書を前編に漏れたる所捨ひあれば今の風景ばかりを圖し換寫し其由縁を記し仍て佛院の塔頭末流のみ院号ハ除限あらされど咸く載ず年毫く名の高きを撰ず縁を

一前編の圖中に遠景の畫あり今これ微細小圖にく其封境が精くあらわれ大悲山牛尾山の麓あり

一圖畫後編にあれど文法前編に出ず文法前編に在ず圖畫あれど後編にあれど兩編應照く其全畫を知難し一大慶了至ては前編に載をとりくべども再書くく漏ざるを補ふ北野社東福寺の數あり

一古人の居所の舊記歌書などにより其地を考これを載ず土人口稱も亦奇あれど除くるものあり

一引書の長文なるに其要約摘ぐ畧書を

洛中神社佛閣の圖にさらに前編に出さり拾遺の街衢小路より
はるかある小祠子院それを画もるに風系ある風系ある因茲大社の系れ
多く圖をえへ四時游観の形勝を寫を
一圖中の間々小大画あり強名所古跡小かくさ其さの地勢にそく
風流の系氣を畫もるをえ旅行の人道に迷ひて里人に聲を上ケ
るる袂えへ野原狐狸に暴風小適ふく笠なくゆく袖
るとの類あり其餘を前編の凡例をそく両編を暁ー
見る面さるて

拾遺都名所圖會卷之一目錄

平安城

- 王城之解
- 大内裏封境
- 五所八幡
- 長福寺
- 佛陀寺
- 毘沙門堂
- 今宮神祇圖
- 稱念寺
- 智惠光院
- 西方寺
- 京師之釋
- 公卿拜賀參內圖 同朝賀圖
- 御霊社例祭小圖
- 上善寺
- 光明寺
- 京極八幡
- 寶慈院
- 福大明神
- 本隆寺 千代の井
- 惠光寺
- 不動堂
- 平安興基
- 九重之盛觴
- 鶯宿梅
- 天寧寺
- 阿弥陀寺
- 飛幻院
- 道正庵 稲荷社 解壽圖
- 興聖寺 錦嚢圖
- 三後荒神
- 天道社
- 紅梅殿 梅詺碑
- 四神之訳
- 洛陽之事
- 曙櫻 霊脊神社 御外庵
- 西園寺
- 十念寺
- 金龍水
- 大峯殿
- 超勝寺
- 獄門寺
- 無量寺
- 北野菜種御供

北野　此辺社繪馬堂
茶師堂
蛸薬師
大將軍社
紹圓寺
内野
慈眼寺
西蓮寺
稲荷荒神
滋野井
伊勢御家
紫平卿家
飛多井

白玉社　朝日寺　煙の宮　神家銘　千向山再興　船宮　連歌堂　紅所
無量塔　御文庫　竹画碑　祈雪碑　忌明塔　文子社
西玄寺
寶樹寺
長寶寺
普門寺　映山紅名所
國生寺
観音寺
出世稲荷
順興寺
二條殿家
鉾児祇園祭
悪源太旧蹟
三條右大臣定方卿家
搏法輪寺
和光院
東光寺
西光院　人麿像
祥光寺
華閻院
梅雨井
大學寮舊跡
和泉井
曇華院
祇園會祭禮圖
法泉寺
清和院
西京
法養寺
立本寺
福勝寺
浄篤院
松林寺
土橋稲荷
少將井　同大王社
不動堂延命院
成範卿家
願樂寺　渾天儀

定家卿家
常盤井
安禅寺
三福寺
教安寺
空也堂踊念佛
聖光寺
徳正寺
七夕梶葉流
鼠突不動
元三大祠
肉桂水
都町踊

白山社
高辻殿大隅宮
行事宮神明宮
閘名寺
寂光寺
安養寺
法然寺
後成卿祠
大江公資家
大師堂　名椿
六齋念佛
龜龍院　龜茶師
道祖神
大泉寺　親鸞聖人開基
飛梅誕生水

布袋茶師
遣迎院　玄水井
梶井大滿宮
妙傳寺
信行寺
了蓮寺
空也寺
南岩倉
御射山諏訪祠
阿闍梨諸社巡
山王社
道祖神
大泉寺　親鸞聖人開基

紫式部家
本禅寺
見性寺
大恩寺
要法寺
燈爐堂
梁預寺
鐵漏塚
住心院　昆沙門堂
和歌所舊跡
午頭大王
平將門祠
火薦社

人麿社
相殿祠
正運寺
休務寺
月瀧寺
本圀寺方丈 同塔頭名蹟
堀川御所旧趾
織部京坐舗
阿佛塚
源頼光舘
洛外惣土堤盛鰌

一道院
児茶師
隼祠
聖徳寺
歸命院 五香湯
源頼義家 耳納堂下
夫橋立
稲荷迄桃灯
猪隈祠

蚯子祠
又旅社
水葱宮
壬生寺鰐口鑼
中堂寺
佛影堂扁折
下間家
本宮塚 新宮祠
東寺神供
高瀬川

本行寺
三寶寺
壬生菜畑
一夜大神
長圓寺
三善清行家
桂宮旧趾
施茶院杜
國姓爺寓居
羅城門奮蹟

周國已千禾黍漢
京芳州千生東方
千萬古只今
平安雄據

伊澤

公卿拝賀
紫宸殿

續千載
民やすく
國をさまる
御代
あれと
春のちとせの
始めをぞ
一条内府



九重天上来儀鳳
五色雲中拝衮龍



えだ小槍姫の
茶屋より
内裏へ
入るを
見送る狂言の
ようす



初室小
元の
茶屋より
豹乗り
竜頭へ
其一ツ
あり



平安城の興基は人皇五十代乃帝　桓武天皇延暦十二年正月甲午朔日
詔ありて大納言藤小黒麿左大辨古佐美等を山背國の勝地叓視
せむ勅ふ給ひきこの群縣叓めくりて　上奏しく曰當邦
宇多邑は地勢郡郡くして四神相應し有徳無疆れ皇州之速に
新都を開き帝城を造るべき叓めを給りて累代不易の都をうそ
因茲同年二月辛亥の日参議治部卿壹志濃王を加茂大神に遣し
めて遷都れうと告たまひはしき二月己卯の日　天皇葛野に行幸
ありて新京乃地理叓　叡覧しめひ五位已上及び諸司主典已
役まを進免新都の宮城叓造営しめ九重を初めて四方れ洛域叓
隍叓めぐらせ廛を興し絶えたる叓継鴻業叓洞色しまふ同十三年
十一月叓詔ありて山國ふ山河襟帯しく自然と城しうるゆゑ叓
文字叓山城と改免給ふ即郡を平安京と號なひる　已上日本後紀取意載肉
の次第い上古より大和國を首垂れし叓承和二年十月　勅しく改め

山城國を六十餘州の冠首し給ふ　續日本後紀
今れ　御代叓至りて一千有載遷都ありし中華叓もいまだ具例叓
寔叓天津日嗣の位しめひてより沸嘗曜川のほとりに住のひる狐
の松乃葉のちりうせずして億兆の歳を彌らんとそ祝ふまる
四神相應の地とて聖德太子蜂巣山のぞり給ひて此
都叓見めぐらして四神相應の地と百七十余年ありて都を遷さてらん事
ねがき所ありと宣ひおきたる　神皇正統記
西叓白虎南叓朱雀北叓玄武とうづけて四方叓かくの如き鬼神れ象
あるとそ二十八宿を四ツ割みて七星乃叓配して
其星の象より起る名ありて宿の主所い時叓より東叓もまた西まも運るそ
きい抱らび角亢氐房心尾箕の七ツの宿れ並びて龍の如し足を東れ方と
し斗牛女虚危室壁の七ツの宿れ並びて虎の如し首を西の方とし奎婁胃昴畢
觜參れ七ツの宿れ並びて縦尾の如し足を南の方とし井鬼柳星張翼

軫れ七ツの宿の並び坐し軫れを水の方と決 東は木ぞ青し軫れ龜と絡ふ
有り次ぬそ朱し軫等の星れ象四方の象ふ配ふて青龍朱雀白虎玄武と
いふ 東垣制度 通取意 爾雅れ釋天疏ふも四方ふ皆七ツの宿あり各一ツの形をうた
東方龍の如し西方虎の如し皆南を首ふして小を尾こと南方名れ如し小方
龜の如し皆西を首ふして東を尾こと礼記ふも四神の旗れ事を四神の中ふ
圓盧門あり是 内裏ふ準ぞる之准南子ふも圓圄は帝天の紫微宮乃
門をいふれ借て 天子の門ふ稱をこと又楚詞ふ天門の圓圄ふ禁門
乃稱ととをきれこの謂ふより四神相應の地といふなり
王城こ王ふ往ふて天下帰往の貌之城を盛之國都故盛受る乃貌ふり
ふ都城ふ三重れ差別あり京城皇城宮城といふ京城こ總て都といふ則
平安城之皇城とふ皇居の總構の内より諸司百寮ふくく具内ふを
所謂大内裏といふ是之宮城を白皇居之 制度 通
京師とふ詩経公劉篇陟南岡乃覩千京京師之野こと是を郤營ふ都邑を營

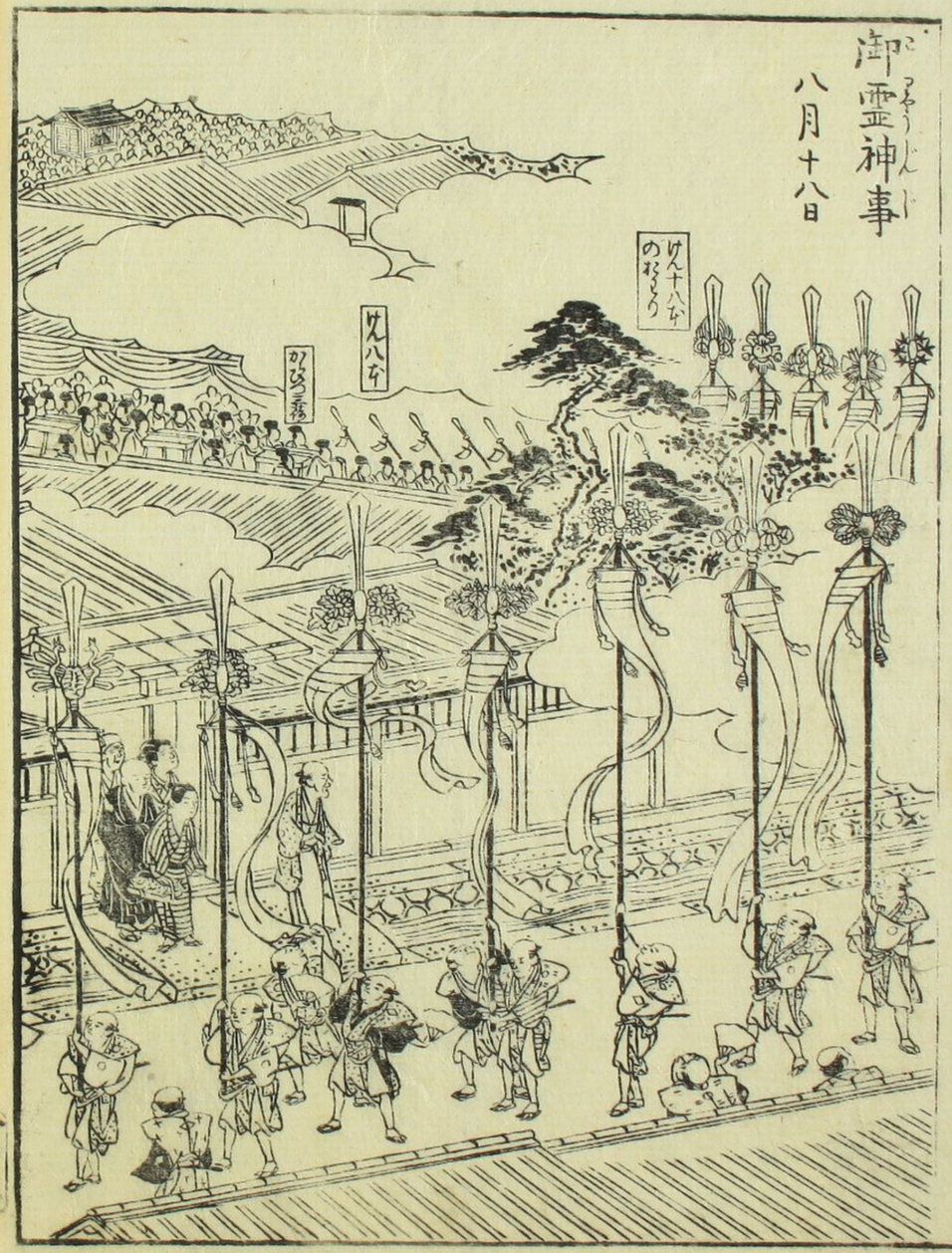
之ぞ処をいふ朱註ふ京ふ高き丘之師ふ衆之高ふふ衆く居をる形り
蔡邕ふ獨断ふ云天子都をる所を京師とふり京ふ水ふたとふて地下乃
多きをふのれふ過をるふれし地上ふ衆きをふ人ふ過をるふれし京をふり
師を衆之大衆乃居をる所をふて 天子の都ふるふり京雨雅ふ云天子高き
ふ居して遠き所視乃意之師ふ衆ふて人民衆くをふて聚るの謂之
九重の都こ稱をるふ周禮匠人職ふ出ふり匠人營國方九里旁三門國中ふ
九経九緯云云註云方九里ふ周の代れ天子の都の廣さ之四方ふ三門ふて合て
十二門之十二門ふ通ぢて十二ふ成ふ國中ふふ皇城ふて宮城ふまふふる之
経緯とふ道條ふて南北を経ぢ東西を緯た一門毎ふ三條乃道ありて
東西ふふの九條ある是を九重といふ都とふ華の訓之花活ともふづく

月清集 昔ふり都志多ふる志のうやをいたうふ虫の宮中ふるふり 後京極
玉葉 ふの上ふれふる乃屋ふ乃ぎ花ふ也ふ雨ふ 院御製
夫木 ちのくやふりく庭のむもれ神を愛るふ世乃初ぎ 後成



御霊神事

八月十八日

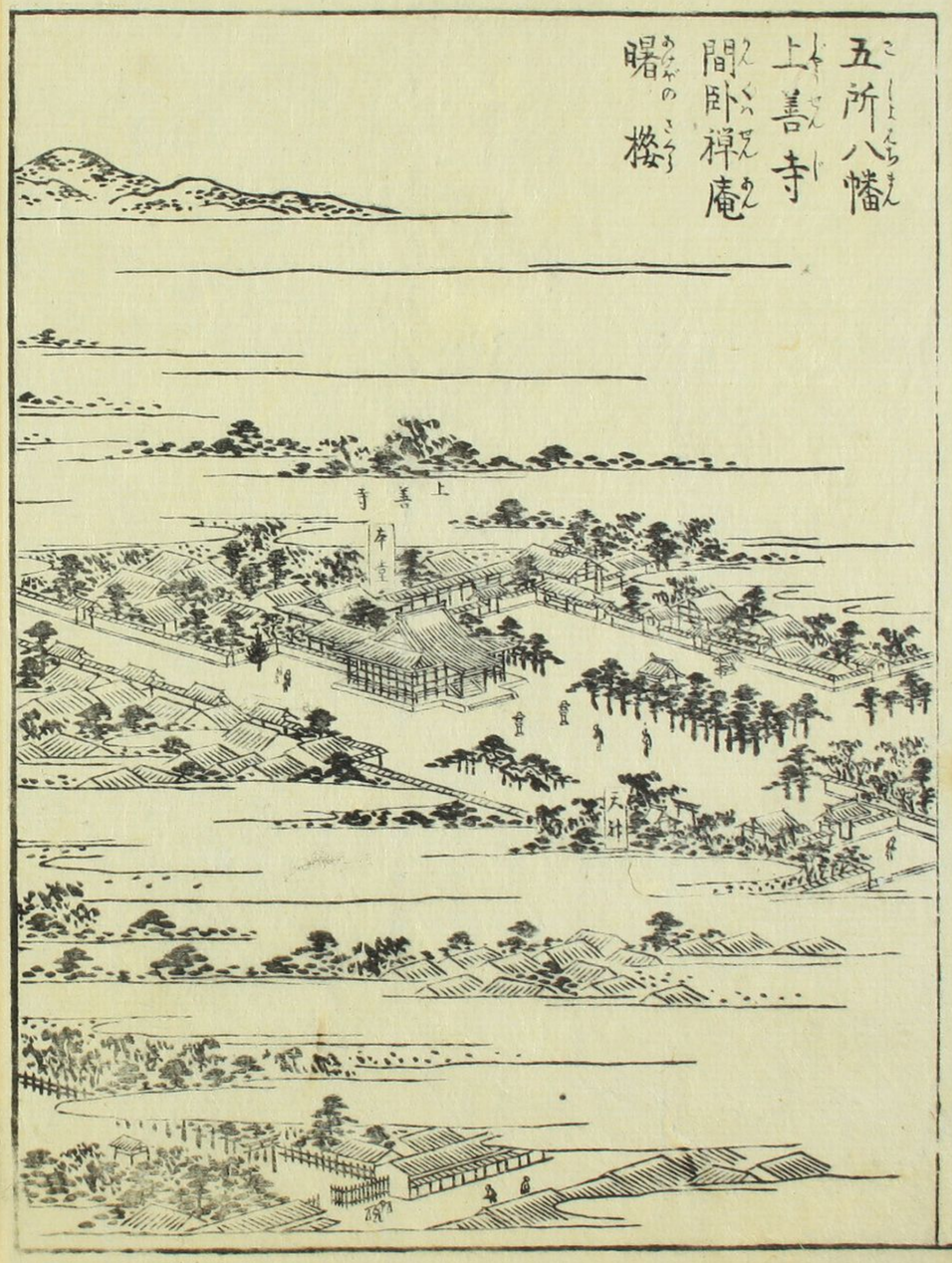


洛陽 諸書略備ふ出ようる孔安國の註ふ洛水の間ふして南ふ瀍水ふ迎しえ雨流
山南水北ふ陽ふいへ故陽ふいへ洛邑ハ洛ふれれ此ふあるゆへ洛陽ふいへ
時都を洛陽ふ移ふるふ依ふいへ本朝いふへ
あづく長安の名義ふ前漢の長安城ふ
大内裏 拾芥抄京狂の圖ふ云南ふ十町一條ふ二條ふ至ハ東西八町東大宮
より西大宮ふ至ハ又平安舊圖考ふ精し
文木 我國の敕れ郡のうちみしもをしるしたる所 公朝
繪今
月清 むさしの産れる風のこゝろあそ花ふ庭ふ
もてなすのよふ 後京極
鶯宿梅 傳云此梅ハ古西京紀貫之の家ふありく應仁
の亂ふ相國寺の内ふうつされ鶯宿梅の殘種今方丈の庭ふ移し植ふ
大鏡曰
天暦の御時清涼殿の御前ふ梅の木乃枯ふるふ尋ふ求させ給ひて西京ふ遣ハし
ふるふ木のありしを堀ふ取ふしふ家のなかふ
たゞ引かへある事ふこゝろえて参ふたるを召て参ふ
拾遺 勅ふまことにいにしへの心ふ
とゞめふあやしくと宣て此者の家そどふ
曙櫻 上東鞍馬口通小山口向臥庵ふあり後水尾帝の
宗みて開基ふ美濃六代千呆和尚中興ふ伯珀和尚佛殿釋迦佛觀音地藏を安ふ

かとみり松を夜ふりえふの燈ふかけおいそく花の色弐 後水尾院

後水尾院尊影 當庵方丈ふ安置ふ林丘寺普明院の御筆画ふ二尺餘
寶鑑院女宮の御讃ありけ帝の御製ふよりて曙寺ふ
霊符神社 當庵ふあり金毘羅ふ長四尺守むり安陪晴明勅をうけて開眼をふ
所ふ霊験日ふ新みて常ふ詣人多し近年社檀建立あるそ
五所八幡宮 同街山口向外庵の東ふあり
蓬ヶ新田大隅正八幡ふ上ふれ後拾遺ふ神祇
後拍夾天皇勅しふく此地ふ遷しゆへ
御所ふ近ふ御所八幡ともいふそ
上善寺 同街ふあり淨土宗知恩院の屬ふ禅刹あり絶海禅師の開基みて東寓するふ
後土御門院後拍夾院西帝の
本尊阿弥陀佛 行基の作坐像三尺余古ハ洛陽ふ
善光寺如来畫影 寛永十一年九月九日後水尾院敕諚ありて勅願所
化人の筆足いみ
不斷念佛之道場の定を給ふ数連ハ万里小路秀房卿之
當寺ハ鎮西派末院の大廈みて塔頭寺内ふ十院あり方丈客殿等の座中真
ふて多石疊樹多の中ふも苔ふ棚ふ連ふ組て弥生乃頃観ふ
萬松山天寧寺 京極通鞍馬口の南ふあり古ハ洛陽今ハ洛陽ふ
西園寺 旧所天寧寺の南ふ隣る淨土宗知恩院末寺基ハ祥山吉和尚松平伊賀守候資稗候ふて再興ふ
ありて西園公経公の建立ふて天龍寺ふ
本尊阿弥陀佛 恵心の作坐像六尺許
威王山長福寺 旧街條通橋の小ふあり宗旨四宗兼学
開基無人如導花園院正和元年ふ建る所ふ
本尊不動尊 坐像六尺許 菅家の御作ふ像一尺九寸
初ハ岩屋ふ奥院の本尊ふ

五所八幡
上善寺
間卧禅庵
曙の櫻





光明寺　京極通條通南の西にあり淨土宗百万遍の末に属す　本尊抱止如来　弥陀者名覚の作立像二尺余宇津宮入道蓮生筆中に抱止しと云ふ西に二階門あり

阿弥陀寺　同街光明寺の西に隣る　本尊阿弥陀佛　弘法の作坐像六尺計四十八願巡の内第十六番に同墓に清玉上人

織田信長同信忠両公墓　戦死臣数輩墓

當寺にあり清玉上人両公乃帰依を受るゆへにや葬ほこの寺に初て上京大文字の東にあり天正年中は北にあり淨土宗西山流永観堂に属す同墓に真阿上人足利義教公帰依しまいらせ永享十二年七月二日寂を遺言ありて多羽川にお葬をたてまつる

十念寺　同街今出川のにあり淨土宗百万遍の末に属す　本尊阿弥陀佛　弘法大師の作坐像八尺丈六寸古い東山を右るの内第十六番に同墓に清玉上人

佛鬼軍圖　一休和尚の筆之佛地獄を描く無比の楽城と一休圖之画もあり　足利将軍諸士念佛講名帳　當寺にあり

ロふるへ奉郎婆ふかきそ弥陀六字の書どとるぬ弥陀を教よ　足利義教

伝と吹風とはうるれくも衣のうちを杖のくしうふ　真阿上人

佛陀寺　同街今出川乃北にあり帝王系圖三天暦六年二月四日朱雀左上皇佛陀寺ふ於て落飾しまいらせ後土御門院の時住持邦諫上人沸戒師となる

本尊阿弥陀佛　恵心の作坐像八尺丈寸古い東山を右るの再興の時

京極八幡宮　上京靈門前西二町ふあり古へ八条極三條ふありて寺祇条極寺と号し社頭巍々として殊更其名今猶残るの産ふあり三條条極乃時此寺ふ楼で力祇石あり其極さの旧地と盛衰記云京極ちいふ是京極さの旧地と盛衰記云京極ちいふ是京極さの旧地と盛衰記云京極ちいふ是京

金龍水

室町頭柳原の南町西側人家裏庭の傍ふあり京師の名水の内にて水性く清冷にして寒暑ふ係らず常ふ増減ふしまの湯ふ可ふして遠近よりも求む紫野大徳寺大心和尚の銘文あり

原此地ハ足利三代将軍義満公の舘にて花の御所ふいふ金銀珠玉を鏤め美を尽せし百花千卉を殿舎今近隣の町を猪熊門町染山町とあるハ皆此舘の内なり

東西ふ四ツ足門あり應仁記ふ載さる永徳元年二月後小松院も行幸しまつり應永二年四月義持公ふ譲りまつりし所なり

南方紀傳ふ永和四年の春二月将軍花亭ふて海あり室町殿と号ハ其舘ふ近くの苑乃ねをはらひ地をたゝきまろめ池を穿ち山を築き花御所行幸記ふ永享九年十月一日御路ハ東洞院を南ふ折中御門を西へ折室町を少し北ふ落て西ふ行きて室町殿の四ツ足門ふ至る管見記ふ永享十一月廿一日室町泉殿御移徙也

比沙門堂

烏丸小路頭柳辻子ふあり相国寺塔頭也

入口之儀ふ稲荷庚申の社あり

本尊毘沙門天

聖徳太子の作ふして古仏ふ多の毘沙門堂ふ安置しまつりそふ其ふいふ所ふ非ず

うつくしき丈六の金像ふまします

明月記ふ貞永二年二月廿一日丙午毘沙門堂ふ向ふ花一枝を立と云々

後愚昧記ふ應安二年二月十九日毘沙門天を信ずる賢人ありと宝暦十三年五月廿一日の夜ふ迫り年今出川花亭井町の辺ふ毘沙門の像ありと風聞して参詣の老若引もきらず二夜同夜を明る不思議ふそひ即ち取り出して諸人ふ結縁さしまつりしとなり

天王寺中ふ若干の寺院ふ至る迄ふ参詣の人ふ相圏るありさまよりも常ふ人の登らざる所ふ人の登らざるハ無しと云々

寶慈院

頓て宝町頭中御門下町ふありて禅宗日野家の尼公院なりしが

開基ハ無外法尼其先ハ城陸奥守の女ふして名ハ千代野姫といふ

故ふありて千代野寺ともいふ

道正菴稲荷社

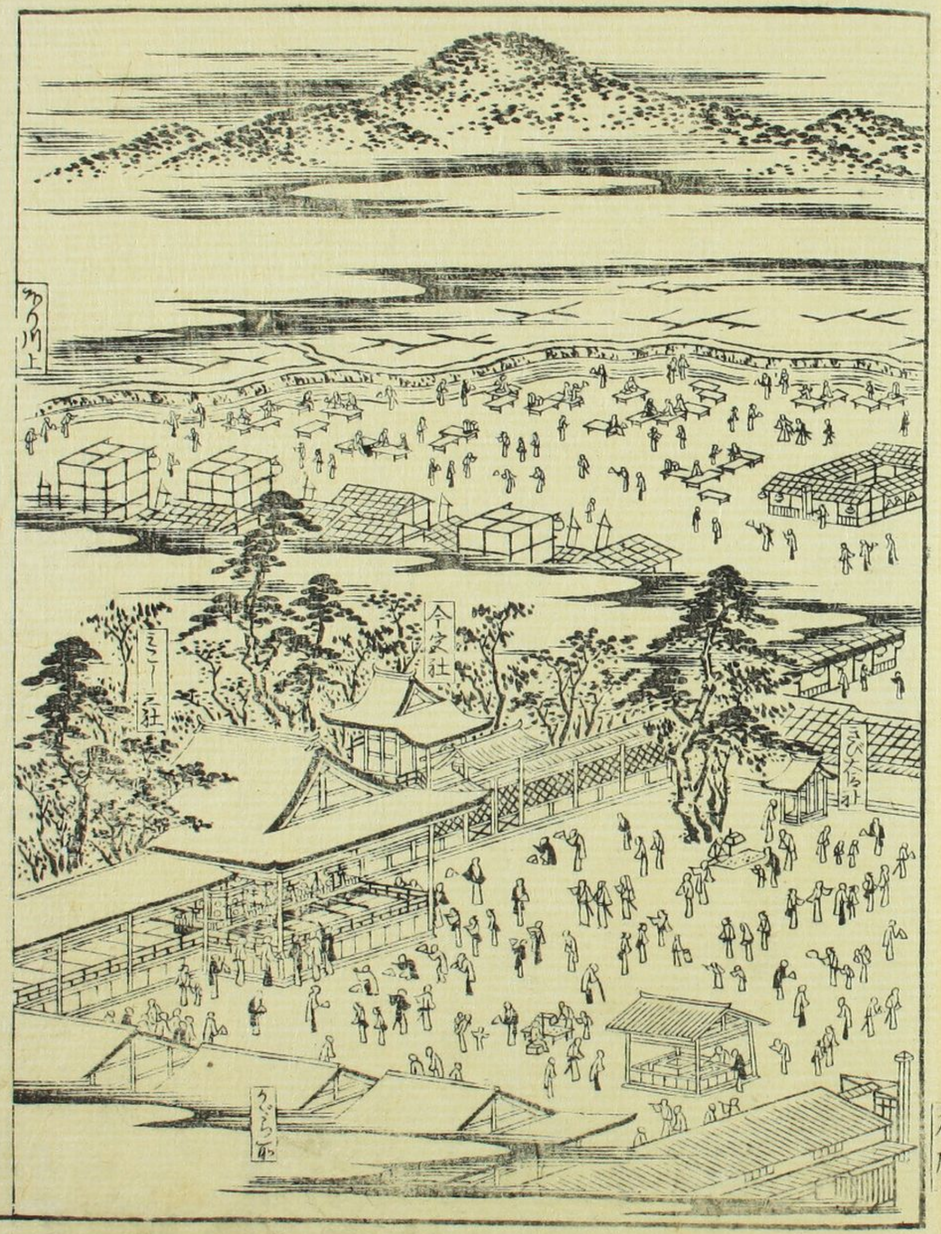
旧所の西道正の辻子ふあり道正傳曰俗姓ハ侍ふして隆盈越前国永平寺ふ来りて衆中の容ふ変じて仮ふ感応せしめんを願ふ即ち感応ありて隆盈ふ随身して中華ふ渡りて和尚所ふ至りまつりしかば和尚ふ告て曰ふ汝ハ是日本三ツの霊地の一ツ也速ふ出ていて諸人ふ結縁さしまつりしとなり

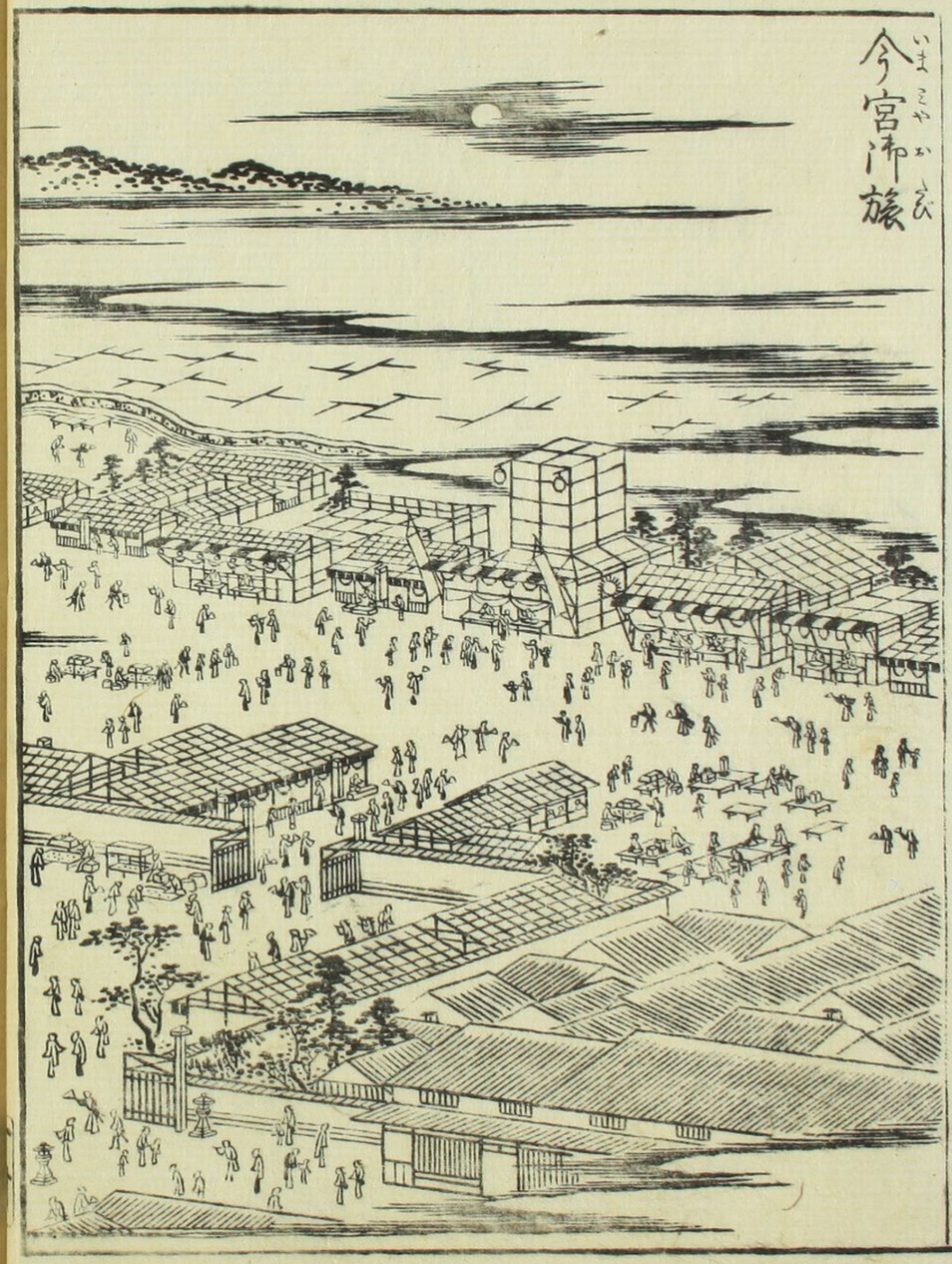
大峯殿

今町中の持物とする旧記ふ失ひ

今昔物語曰

京ふ外術といふ事ありて好ふ役しまつる下衆法師ありけり隣ふ有ける男ふ法師の家ふ行て此事ねんごろふ切ふこひ願ふ法師がいふやう頼ふ人ふ仏ふなりまつる事ふ非ずとてよく速ふも教さとりなんと云ければ七日堅固精進して法師



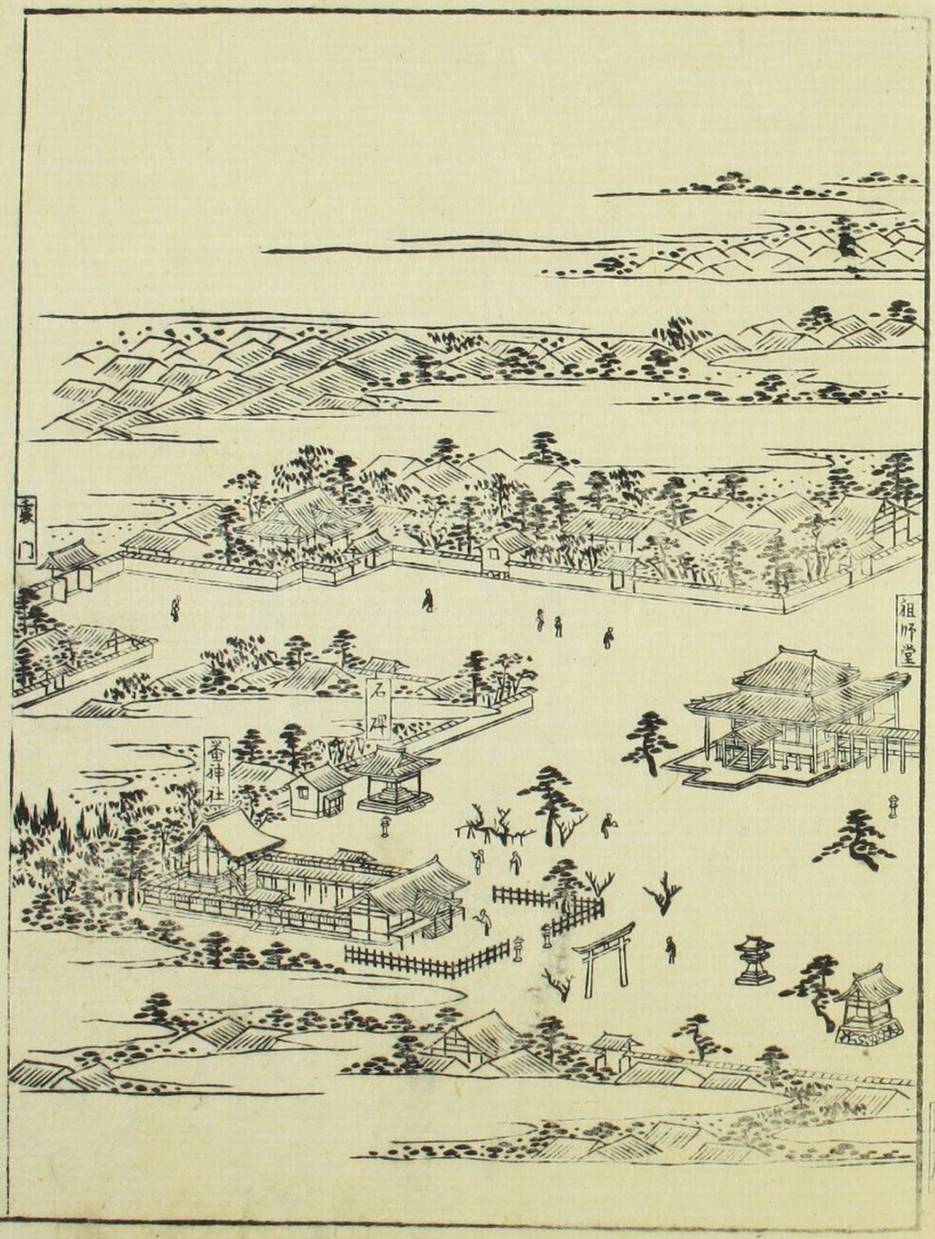


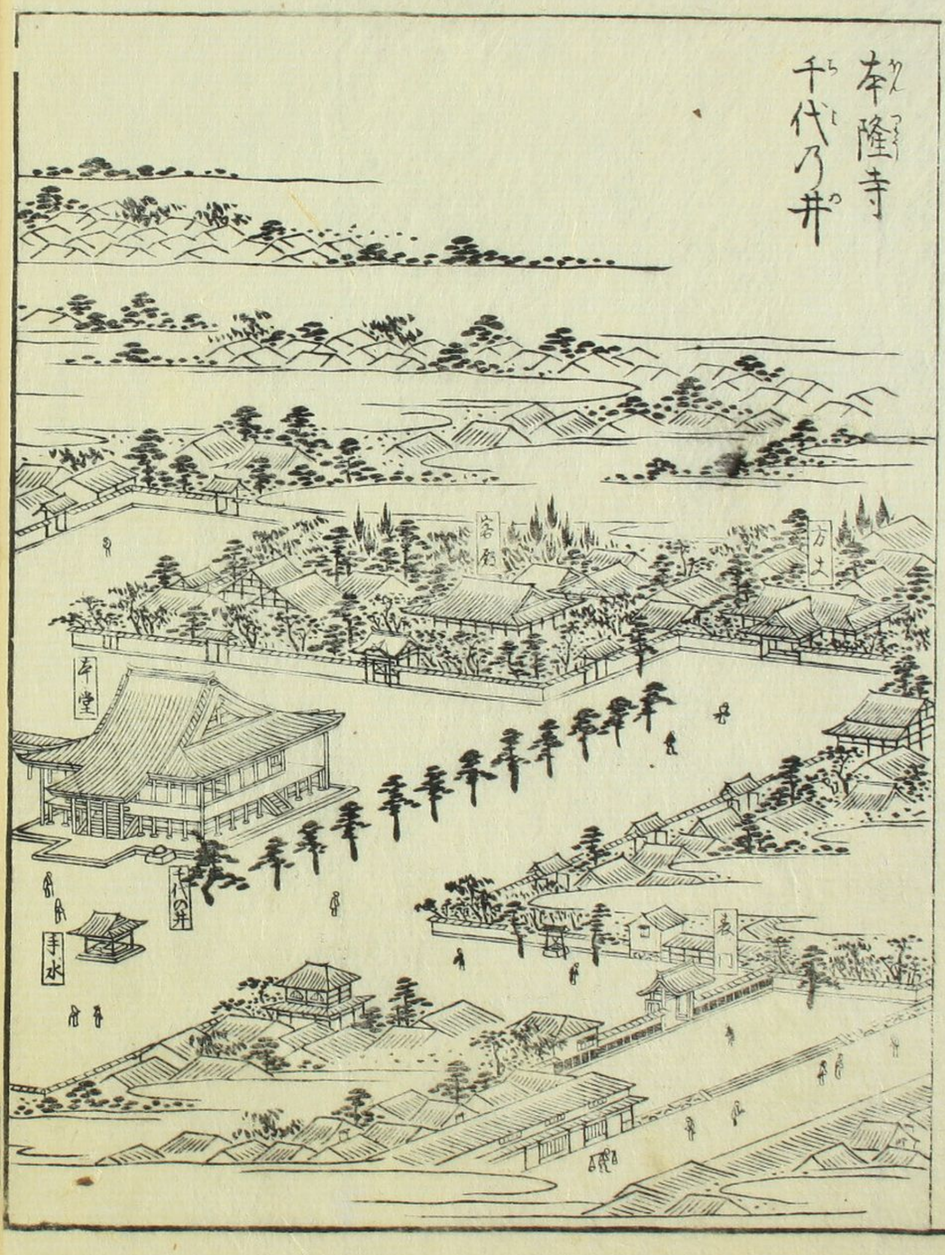
今宮詣旅（いまみやもうで）

前ニ立テ行ケル程ニ此ノ中ヨリ年ノ程五十余ナル僧坊ノ様ナル実体ニ見エテ長ケル僧乃出来テ法師ニ云ク我ハ此ノ宮ニ住セル者也ト云テ男ノ有様ヲ見ルニ男ノ年ノ程ハ廿余ニ見エテ形チ美麗ニシテ身ニ懸ケル刀ノ装束ヨリ始メテ皆ナ尋常ニ非ズ男ノ云ク我ハ是レ日吉ノ聖人ノ御子ニ有ル者也ト云テ男ノ懐ニ刀ヲ取リ入レテ法師ヲ将テ行ケル程ニ一ノ所ニ至ヌ其ノ所ニ大ナル堂ニ只一ツ有リ其ノ堂ニ入ヌレバ内ニ多ノ人有リ其ノ中ニ一ノ僧有リ其ノ僧ヲ見レバ年ノ程百歳ニ余リテ頭ノ髪モ眉モ皆白シ其ノ僧ノ云ク此ノ男ハ我ガ弟子ニ有リ而ルヲ此ノ男ノ懐ニ刀ヲ入レテ来ル事ハ我ヲ殺サムト為ル也ト云テ其ノ僧ノ懐ヨリ刀ヲ取リ出シテ法師ニ与ヘテ云ク此ノ刀ヲ以テ此ノ男ヲ殺シテ我ガ命ヲ助ケヨト云ヘバ法師ノ云ク我ハ此ノ男ニ何ノ恨モ無シ何ニシテカ此ノ男ヲ殺サムト云テ刀ヲ投ゲ棄テツ。

（著聞集 二 知足院殿御事）

乃法師ヲ将テ行ケル程ニ二七日ニ満ル日知足院殿夜ニ入テ御ケルニ御前ニ多ノ人ノ候ケル中ニ年ノ程廿余ニ見エテ形チ美麗ニシテ身ニ懸ケル刀ノ装束ヨリ始メテ皆尋常ニ非ズ男ノ候ケルヲ御覧ジテ此ノ男ヲ召シ寄セテ御前ニ候ケル人ニ仰セテ此ノ男ノ懐ヲ捜サセラルルニ懐ニ刀ヲ持タリケレバ其ノ刀ヲ取リ出シテ御覧ジテ後ニ其





本隆寺
千代乃井

三俊荒神　元誓願寺通大宮の西ふあり本ゐ荒神ハ壬生の祀之像二尺又寸尖災除滅の霊験あり古より西陣の民屋数多崇上あまたゝ仏田禄の多分愛宕山福寿院の兼帯所なり

獄門寺　西陣七の社の西ふ隣る一名西福寺とくむつ此内裏の北門の南元獄の傍ふありて寺僧斬罪の者ふ引導を授くること慶長乃初秀吉公朝鮮征伐の時かの地の歎兵数百人を斬して其戸を大佛殿のおかつこめ耳塚と号し四御ふ仕せ當寺住職乃紡越存上人ふ供養乃導師一数仟ねんらは其時秀吉公より資料荒廃してちくふうし今小老存ふ本ゐる薬師佛ハ聖徳太子の沖祀立像四尺計原大和國高市郡ふあり一條院沖宇寛弘二年八月廿七日

智恵光院　智恵光院通一條の小ふあり浄土宗知恩院ふ属に開基ハ如一國師本尊三尊佛　弥陀観音勢至を安ん

恵光寺　浄福寺通一條の小ふあり法華宗本國寺ふ属に開基ハ権大都日安上人本願所之ハ人々久我畷道公の息女ありて俗名弘保佐女とふつくけるの足利義輝公の北野本式部死亡の後の室女傍とあるを追福の為寺院ハ鷹司政所の建立之

天道社　千本通安屋町ふあり祭神日月の二神

無量寺　日街の北柏町ふあり浄土宗本尊阿弥陀佛　丈六の座像四尺計

西方寺　小野真盛辻子ふあり天台浄土宗坂本西教寺ふ属に開基園城寺大師本尊阿弥陀佛　俗称大師の祀坐像三尺余

不動堂　七本松通今出川の南ふあり本尊ハ智證大師の作不動尊の不動堂ハ後鳥羽院勝乃寄附之

紅梅殿　小祠宮東の門一町餘東ふあり勧請の由致系縁ふ又くり傳ふ梅鉢の碑あり背文ハ東坊城大納言綱忠卿銘文筆跡共ふ久川勤負

菅公手植梅銘

愛矣斯梅　蘭孚含章　必弗瓊次　黝儵耿光　祥風翕習　傳馨外方　候氣候根孔蔚　孔彰允歆　金石多歴　星霜徳比聖檜　愛均甘棠　鴻名有赫　億世無疆

天満宮菜種御供　西京靭負町ふ沖供所を毎年二月廿四日　鳥羽院沖宇天仁二年より始りて北野宮の沖忌を執行せり其日の夜ふ入て沖供田祇頭ちまる家より太ふの神供のそぐ調へ沖供所ふ餅ける宮司の面々ハ相向ひ並立く神前の階下ふ至て沖餅供と宮司の一老二老神おふ出て一老の左膝の供物を捧ける二老の右膝の供物を捧てものく神おふ供ふ大沖供ふ飯を堆盛て其上ふ菜花を挿と故ふ菜種御供と称を年ふよりて菜花ハまこと咲さる時ハ則梅花を挿むこと毎歳六月九日都下の人々ハ本社ふ詣し南の門の外ふ出て又本社ふ詣しのぶくるまハ九度ふ至れを九度参と云ふ日ハむつ小野ふ初て遷坐し祇ふ日之ふぞ七月六日ふ陣ふ蔵ある神寶祇幣殿ふ出て其祇幣ふ此日も諸人群参しく其間ふ宮司の衆僧内外の陣れ煤塵を掃ひ同七日れ暁天ふハ

松梅院ニ入人囲ニ陣ヲ入テ御手水ヲ献シ神寶ノ中松風ノ御硯ノウヘヲ穀葉坂ヲ至テ貴ク足七々ノ和哥ヲ神詠シ奉ラン為ニヲ又御祭禮ムリヘ八月廿日ヲ行ヒテ具ニ於テ麗巌ヲ見テ所ヲ迂シテ其道條二十餘町ノ間北上ヲ蜀紅ノ錦ヲ布ケ奉ル羅綾ノ社ヲ風シ音樂ノ聲雲井ヲ傳ヘ當社ノ旧記ヲ案ルニ初雪ノ旦ハ都下ノ驗人當社ヲ詣シ和哥ヲ献詠シ奉ルヨシノ風俗ニヲ菅原氏ノ五條殿高辻殿東坊城殿ニ家ノ息男十七葉ヲ及ヒノ時神前ヲ詣シ幣殿ヲ於テ文章一篇ヲ撰シ自書シテ奉ラントヲ願ヒ奉ルニ後秀才當ニ此時右近馬場ヨリ南ノ門ヲ入テ傍ニ南ノ門ヲ入テ坊城途ニ出ル菅神始テ七條文子ヲ宅ヲ現シ給ヒシヨリ文子ヲ末裔ヲ代々仁ヲ以テ稱シ神役ヲ勤ム其婦モ亦世ニ文子ト名ヲ女巫ヨリ松梅院妙蓮院徳勝院ノ三家ハ社司ニテ其餘目代宮司ノ数輩交々神役ヲ勤ム寛ニ治北ノ大厦ニテ聖廟影向ハ千載ノ昊霜程近シトイヘトモ神威ハ日々ニ新ニテ詣人常ニ間断ナシ

石原

北野社　小野地ニアリ神ニシテ天満宮本殿ノ後東ヨリ第一ノ社ニ仁明帝ノ為ニ初テ天神北紙ヲ奉ルト云土人小祠殿ト称ス

白太夫社　本殿ノお東像ニアリ或ハ一説ニハ勢州神主春岌ノ霊ニアリ

老松社　本殿乃後ニアル所ハ菅神御愛松老松乃霊ヲ八雲御抄ニ老松小祠ニアリ

社頭雪

年ふりし名も老松乃神ならば雪ぬ枝なき色ヲ見ん　雅世

朝日寺　本殿ノ西ニアリ古ノ遺跡之ヲ田ノ北ニ沙門堂ト云本尊観世音立像二尺餘朝日寺ノ南ニアル梵灯庵心盛僧都連歌ニ志ヲ於テ大事立水ノ巻卧龍乃ヲ前句人ヲ云テ附句秀逸ヲ来ル神感應ヲ云

煙の宮　朝日寺ノ南ニアル舎ニ烟ヲ立ル堂ニヲ

身ハいつ乃煙の名ニ立ん　心敬僧都

篠の目ニ連有ヲ引テ小社ノ宮乃末社ニ煙の宮ヲ云ヒ灯ヲ点ル事ヤヲ云

此僧都ハ廣峰住心院ノ行職ニテ

此碑画馬殿ノ西ニアリ銘ハ堀禎助　書ハ烏石

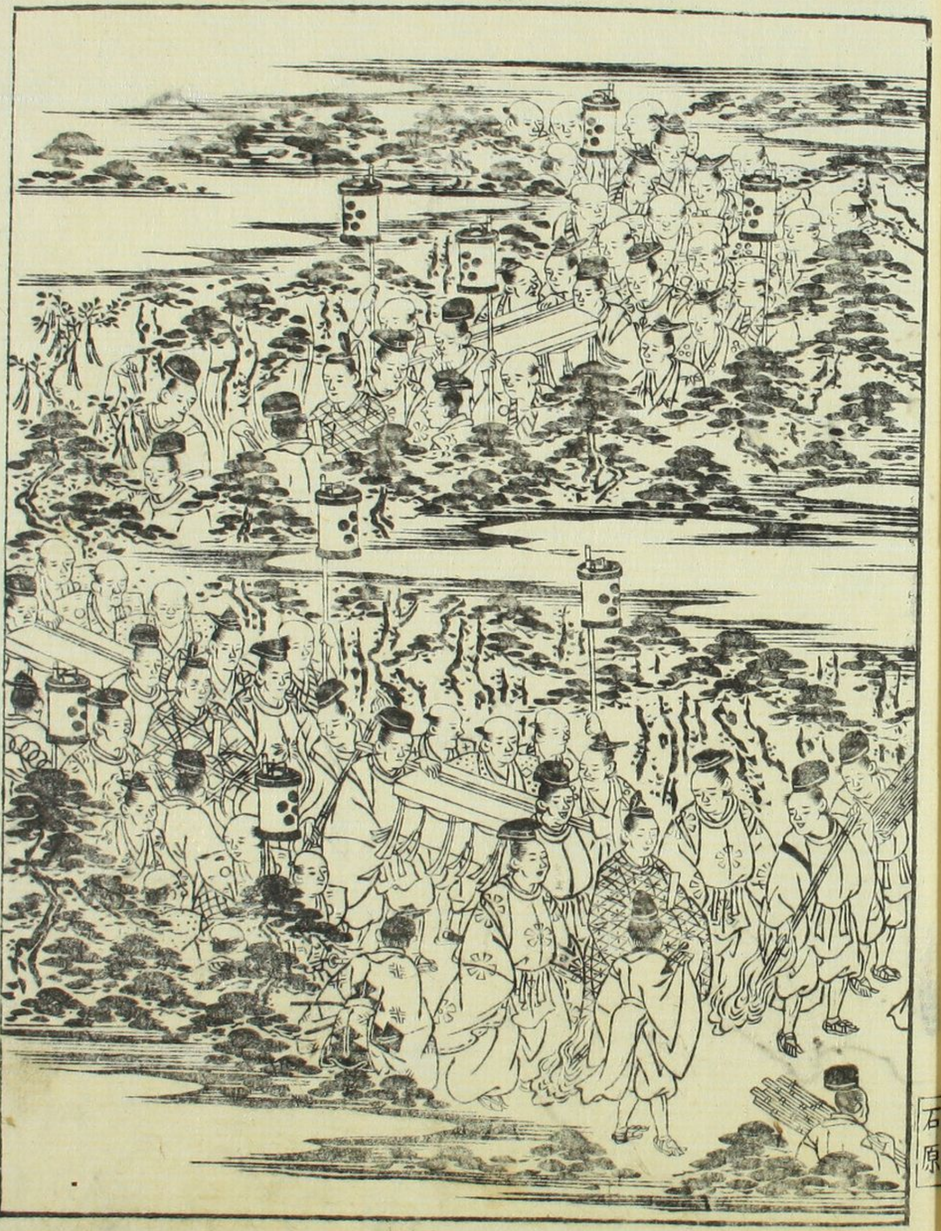
北野社家銘

銘曰

烏蹟己降入文津興衣帛木葉亦與斯文惟顛將聖克念入神書草蘊崇功進成山肯北雞助宜貽子孫分而爲石石可與言龍蛇前盤毋乃生雲縢康桓纂屈正超銘寛保三年癸亥夏四月烏石山人書立於北野廟側

手向山楓樹　菅家碑の南ニアリ南都ヲ向ニの丹楓ヲ奏ヲ向ニ植ヲ

此神詠ヲよろそ木陰ニ手向ニ楓と錦ヲ標石アリ





北野天満宮
茅種御供

船宮 本殿中門の外西側ふあり小神次資ふ曰船宮ハ一夜の松の霊と天暦九年三月十二日菅神御託宣ふ吾棲んで所ハ一夜ゐ千本の松ハとだゑゑ八乙御歌ふ述懐

新千載集 寄松述懐

一夜松子世乃末遠や本そくおりぬ幸も位を　前参議為長

去くほくや高雄去ま一夜松　角上

連歌堂 船宮の坂ふあり毎月廿五日ハ所ふ於て法楽の連歌あり乃人連坐ふ抱ら比句を詞ことば筆者の連おとゐ人又正月四日ふ裏白連有あり凡て連有乃懐紙四枚之中古執筆乃人謬ゐ斤白紙遺しくゐ記らだ是ゐ流例とあゐて所白紙遺ゐ又一紙を添ゐ五枚ゐ改ふ裏白連歌とゐ今仏堂ふ陵唐天神祝安ら

連歌懐紙

繪馬堂 中門の外西の方ふあゐ仏所ふ掲る書画詩歌連俳ハ都下及ひ遠き国々ゐり年毎ふ数くゐ仏ゐ名画名筆多し中ふも南都浄泉の筆薪の絵馬の紙れ圖ハ大絵ゐるみて世ふ名高しゐ又四月毎の廿五日ふハ神楽ありて社中門廻廊あゐハ松枝梅枝ふむそひけく奉納し仏ゐ事仏陵ふ惜ゐて歌ゐ年々ふ掛ゐ石燈爐乃数くゐ松梅の木ゐちゐ仏祝ゐ多し

宗祇

聖廟奉納

梅さくや白くも濃くも大自在　移竹

無隼塔 画馬所の南ふあり菅霊中華乃経山寺ふ到ゐく無隼和尚ふ謂しゐ由縁ふゐり塔祝ゐふ立体足渡唐天神乃盤觸之

北野御文庫 神楽所の小ふあり菅神所仏の書巻祝多寶塔 御文庫のおふあり本尊大日如来脇士四天王

経所 神楽所のふあり安置ゐる所香賢不動愛染北斎聖観音共ふ霊ゐるみゐ

いみ〳〵乃朝日寺諸堂の本ゐちゐ仏祝ゐ多し



竹画碑中門の東ふあり
画ハ宋紫石
銘文筆跡共土岐中書

此竹数尺耳而執杭萬仞木巣影蟻金鎗屈鐵神飛彩動不見其墨汚之處所謂公與此竹俱忘形者也君赫之画得之清人宋嶽々得之流詮々得之李用雲其法尤可喜也嗟乎稱漢画者多不辨八格十門下筆則曰合天地耳鑒者或左其祖則其尊乃在君赫矣君赫姓宋名紫石江都人也與余善其徒副段明勤之石以建於北埜菅公祠畔蓋不朽其美也

兎玨鵲落　不篇而成　庵心貞節　銘曰

寶暦癸未秋七月　維神所亭　平安　源之駿撰

絶句碑 南の門おふあり頓阿法師四時わ為祝題して五言絶句五十首祝咏ゐく奉納を石州浜田散人洋井庸充　詩ハ繋ふよりて書仏

祝壽碑 苗乃花萼の内ふあり州廬龍公美古稀乃賀章祝鐫文ハ略仏

背文萬壽無量

忌明塔 旧所の苗ふあり五輪石塔婆高サ八尺許おふ石乃を居あり古へゐり服藏祝脇ふ佛士ふ至ゐしめ為の供養之爾ふより百十餘年の今ふ至ゐて怠ゐおゐし

文子社 西京所供所の苗ふあり初発天満神七條文子ふ神託ありて其宅ふ鎮坐しまゐ後世其由縁を以てふうゐし祠を仏とふむ

藥師堂 小ふ所ふ在ゐ下の森の小東側ふあり本尊ハ博教大師乃祝之ふ云大師自祝作像祝安置ふ仏ゐ中古真如堂東楊坊ふ住しゐ専薬湯を嚙む利益の数多仏ゐ

萬松山西雲寺 旧所西側ふあり宗旨ハ天台律ゐ仏ゐ恵心流之本尊ハ阿弥陀佛ハ恵心年れ草創之當寺ふ毎朝水施餓鬼あゐ上人あゐく寛文五脇士ハ見性坊章海ふ毎朝水施餓鬼あゐくれハ飛罪餓死擯死れ軍ふ悪道を仏至ゐしめ為の供養之爾ふより百十餘年の今ふ至ゐて怠ゐおゐし

獅子吼山轉法輪寺　一條の西七本松の北にあり地名を城龍の嶺と云　當寺は
洋土鎮西派圖の前編に見へたり
櫻町院の御宇宮中より令ありて寶暦四年に尾張國圓通上人建立せしめ
本尊は弥陀尊坐せ給ふ長一丈四尺餘り面の方に達摩門あり鐘の銘九尺挾四尺
二寸計銘文は從二位行右大辨菅原朝臣在家卿の撰みて仏寺造立の由致を記し
給へり香積界の次の方より一條の門を棰花門とかゝく一條城棰花坊と云
名義より出ん
次に四天門あり南の門を照臨門と云ふ直日察雲察の樓門の傍にあり
貝葉翻て就鳥嶺を仰ぐ龍華れ梅岡しそこと栗に苦しく常行念佛の聲寂
寞として本奥の音は布谷に加ふ松の風に伴ひ十地の座をあらはす
云ひて真に殊勝の洋域也

蜘蛛塚　七本松通一條の小西側圍の中に一丈計の塚あり土俗
蛛搂しゝと呼ぶ此塚に付ては古へ此所に大きなる土蜘
在平記叙巻に曰　其の比源頼光瘧病煩悩ひ給ふに日毎に發る
ゝりおこりぬれば頭つゝく身はゝをうやまれりかゝる處に遍照と云る半三十
おし減ぬれば醒方ふうりゝれど四天王の者とも看病しゝるる間所に入て休
ゐり頼光がしを夜ふけることのるゝれたかをあり灯火のかげより長七尺計の法師
るゝくなゆをよりて繩掛さいとゝそ頼光ふせんとあれど頼光
かゝと記に着ふまを頼光が繩掛んとゝそ悉ふ奴ふくそ抜ふ立ち
ふ脇元ゝ取ゝゝ切四天王とも風
やゝれいふくゝそ宮ひゝゝ灯墓
いてこれで妻戸ゝをのゝ入ゝゝゝれど
大さゝゝ塚わりかの塚へ入ゝゝゝれど
山蜘蛛のそゝをゝこれ抜ゝゝめてゝ
里社乃やつふゝらゝれ三十余日
をべゝゝゝて鉄の串ふさゝにふふ立てゝ
ゝゝゝあは

寶樹寺　七本松通蛸薬の東にあり洋土宗西山派誓願寺に属して本尊阿弥陀佛は
往昔大師の作三尺計の立像之開基は快蓮社洋誉上人
大師堂　寺内にあり弘法大師自作の像二尺計天長年中疫病流行し給ふ
頽の為に高雄みて作て左政大臣藤原良房公へ授與し給ふ像なり
和光院　真盛町小例にあり真言宗にて吉祥寺と号け本尊は大師乃
西京　歴代編年集成に曰西京は葛野郡之右京と名分明之今は總て小一條城限りを南は下立賣の南二町餘り北は
東は千本通西は紙屋川の西二町餘りを西京と云

右の京往古しより人のとゞまらざりしを
家集　某ゝゝみむとをしゝ萩はかふ歩たゝみしゝある人や杖をまつらむ　元輔

大將軍社　西京一條の西大將軍町にあり王城鎮護の為むかしは四方に社ありしよし
將軍具註に曰天帝祇官ゝゝ將之分て二十二天ふ行を給鬼神を領して四方を鎮護
ゝゝゝ云一説中古兵乱の時京城の小方ふ蜀の関羽の廟を建てゝるゝゝ

清和院
蜘蛛塚





長寶寺　大將軍の西にあり本名十一面觀音ハ散神の所化老立像丈六計洛陽觀音巡乃第北九番なり

東光寺　西京清お通下の森の南にあり本尊阿弥陀佛　安阿弥の作立像一丈二寸余拙作にて中興しる人其比豊臣秀吉公の愛妾松丸殿法誉上人に帰依し秀吉公戦場へ出るの人形必ず殿乃中に携へ給ふ人故に陣佛と称ふる霊ある仏寺なりそれより當寺の本尊をも軍戦勝利如来とも称ふ

法華寺　旧町にあり法華宗武列池上本門寺に属ス古へ日像上人説法しる人の迫害に遇ひ白狂忠公乃息男出家しる人智覚正覚祐存の三人と具して京師に至る小祠を過ぎる人みかの鏡誰ぞ驚そ即法華宗に信伏して日像上人に従ふ人師資の約を結ぶ大覚大僧正是を真俗寺と号つく半経て再建ス

起圓寺　旧街法華寺の南に隣ル本尊阿弥陀佛　三尺許　恵心の仏立像　観世音　跡追地藏　二尊共に恵心の仏表の方小堂に安置ス古へ江刕堅田の別院ありしが元亀二年織田信長山門の大衆と合戦の時運阿弥と云人僧兵共に城入事を歎き仏像を奪ひ具に此地に移るといふ然るに堅田の農民彫刻なりとて都に出して観世音とするに非ず頭を海度ぜんと命しる人それより後に至りて京師に至て山所の観世音とは座に故と云迫地蔵なり

普門寺　旧街東側にあり禅宗本尊聖観音　世に映山紅寺と云　赤椿樹にて點音羅尼乃仏の開基鑑真上人唐土より将来の霊木なり

帝釋天　寺内に安置ス弘法大師の仏初ハ丹刕本尊と同作なり

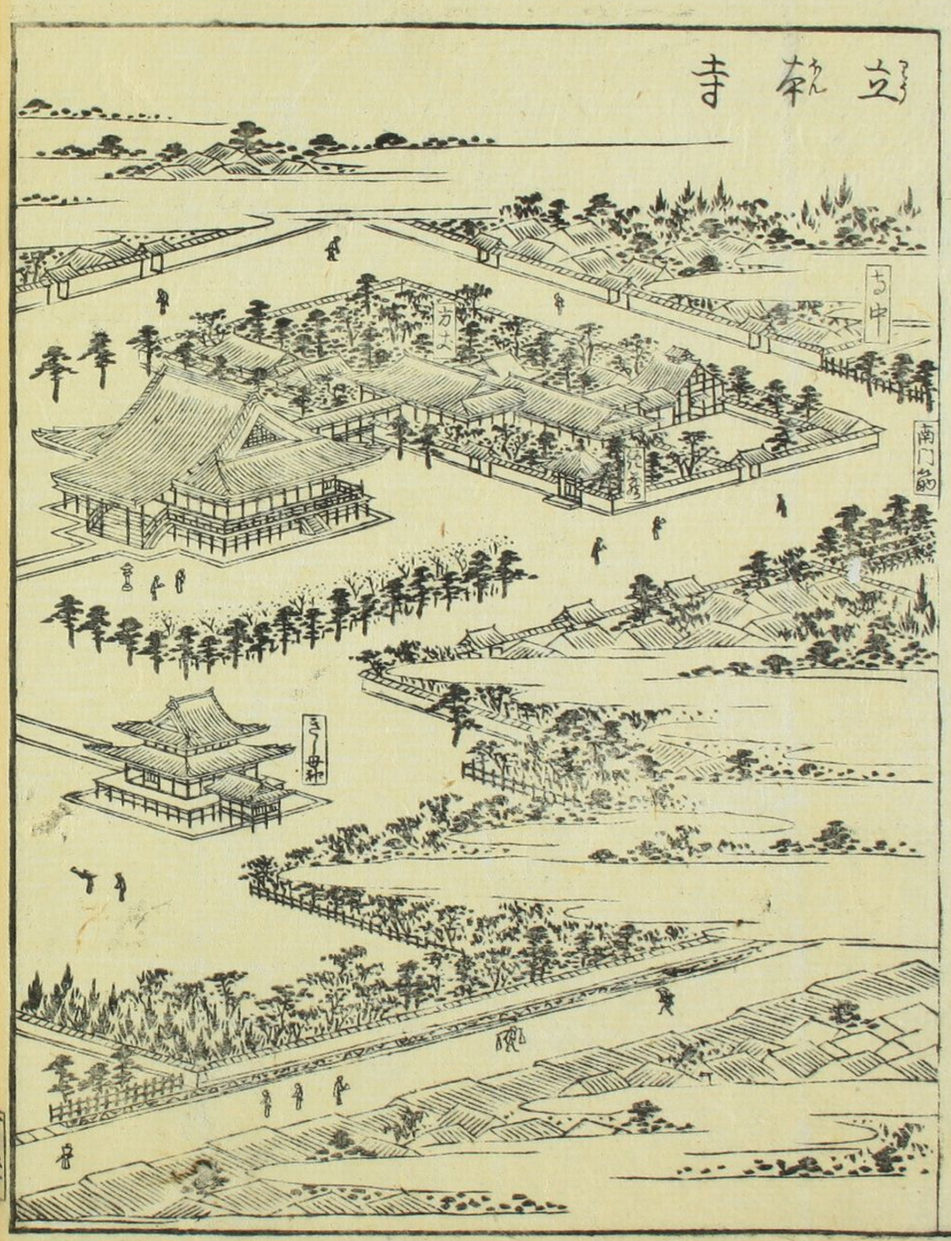
當寺の庭中に映山紅躑躅数株植て本の長さ丈余の多し弥生の花盛を見る錦繍乃林なるし紅躑躅ふり杜鵑花ふり映山紅ふり躑躅ふり灌くさ出しる都下乃人こ具紅艶を賞しても尽ず祥来ふ故に映山紅寺とも唱ふそし映山紅ふり躑躅ふり杜鵑花ふり灌くさ出しる都下乃人こ具紅艶を賞しても尽ず祥来ふ故に映山紅寺とも唱ふそし

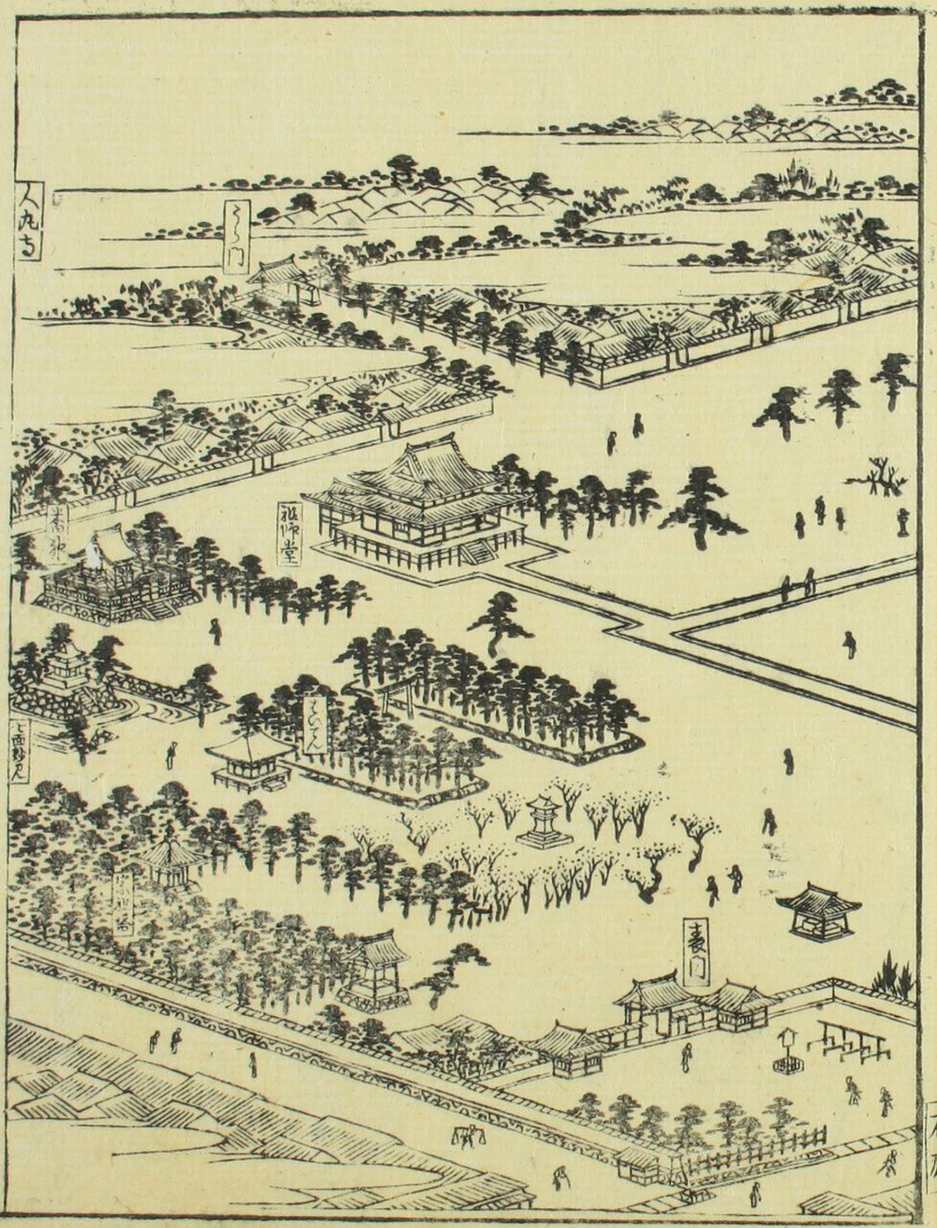
二軒町にあり　旧街　舊名ハ仁和寺街道　大聖山西光院　西京清前通の東二軒町にあり　宗旨ハ浄土律　常行念佛の浄刹ニ門おふ大門外相の標石を建ふ

本尊阿弥陀佛　金銅佛立像　坐像七尺　開基西隠上人俗姓ハ近衛殿下の家筋ふり延宝二年ふ官祓辞しる出家得脱し諸國を巡行ス本尺五ケ年厥后都ふ帰ス

弥陀尊祓造立し精舎を立ふ慶長の頃方廣寺大佛殿の銅像祓木佛ふ改造らまんそ鑪ふ入まし此佛像の母指ハ於豊陽尚元の如し諸人奇異ふりして妙法院ふ蔵む西隠上人の佛像造立乃事祓開眼乃後其母指祓賜ふ即鎔範ふ入て鑄ふ忽相好圓滿の佛像成就ス

延寶八年三月廿五日浄華院晃蓮社上人をして開眼ある寺院の本尊をこ迎衛殿


方丈
古中
南門前
さくら


入九ち
祖師堂
しらん
表門
石原

下大圓滿院良材を寄附ありて速に創建ある今の精舎是之
國小曰大佛殿相像の
事首を改て洛ふる
加茂靈鑑寺の鐘故鑄る事ハ前編に見へたり
文祿慶長之際上人の入寂ハ享保六年辛丑七月九日なり
人磨石像 當院佛殿の後堂に安置ふ享保六年辛丑七月十八日の曉ふ南院より
坐像二尺許厨子
菜苞あるものある具ハ所乃人ふ寄附ありしを以ふ此像ありと云ふもなし
本ふもあり淡樟の原ふある事ふあんべて雜ハ首ふ烏帽子故冠ありの膝を立ひて
画ふかけるハ人丸のやしづくありの捨墨々んとて人ふ不審をなし南院の門おなりしば
此寺ふ安座ハ世乃人皆よりよく人丸寺と呼ぶ其後洛泉嶌打郷入道し法ハ澄覺
と名乗りて此頭を頂き本尊の由緒人磨れ像れてふこのうち具り記
しありひ後ふ六字の名號板首ふ冠らせて六首のおを詠共ふ筆板深きハ一
軸ふて當院ふ藏ありと

内野 西京のふりにて一番町より七番町まであり古 大内裏の作時皇城乃内ありし
委ハ大内野と云ふ明徳の比ふ名氏清謀反して足利義滿公と合戰ふて敗北
之後ハ民家建續きて飛梁轆轤の家所々ふありて擬琴
新帖いろはせんの内野の芝生年を乃そおもはせりふせりよ板 為家

新後拾 九ろの内野ハ雪ふ花ハ乃名所ふありの歌

國生寺 内野五番町ふあり淨土宗黒谷ふ属ハ本尊阿弥陀佛ハ慈覺大師の作立像
四天許之真如堂ハ本の名乃ある聖徳太子作ふて
左子堂 門おふあり聖徳太子三寶救世觀音の相好ふ故ふ本尊ハ
烏樞沙摩明王 左ふ堂脇壇ふ安座ふ
祥光寺 内野六番町ふあり淨土宗西山派本ある阿弥陀佛立像又又許開基ハ後鳥
羽帝の御宇ふ
運ひ脱法の聽衆祥集して掘麻のごとく遂ふ寶暦年中此寺板草創しくも
常行念佛の道場といふ
竹林山福勝寺 内野六番町ふあり淨土宗西山派本ある阿弥陀佛立像又又許開基ハ覺譽僧正
福聚山慈眼寺 旧街七本松の東ふあり禪宗曹洞派本尊聖觀音 延鎮の作坐像又す許洛
小野隨心院ふ属ハ
旧時乃風と云大雲永瑞和尚本願ハ陸奥守成正之 仁人ハ織田信長公の伯父
尾刻名後屋万松院ふ
化ありの歯寺筆ハ西陣石屋
乃辻子ふありふ慈眼寺の
中ふ今の地ふうつり板今慈眼寺の
華の地ふて沙門の居ふべき所ふ
素師ふ在る所ハ宗仙寺天寧寺
觀音寺 七本松通出水ふありて本尊阿弥陀佛 遠覺大師の作立像三尺一寸開基ハ方誉梅
林上人慶長十二年の創建なり
觀音堂 門ふ向ふ本ある安の孫の作之像ふ属ハ本尊阿弥陀佛 遠覺大師の作立像三尺一寸開基ハ方誉梅
林上人慶長十二年の創建なり

北野

映（うつ）り山（やま）紅（くれない）に



全盛（ぜんせい）の

夕霧（ゆうぎり）

しまる

うめく

雨夜（あまよ）の

めぐみ小

三つ（みつ）あり

紙（かみ）

泉雲



華開院　西京藪賀町ふあり浄土宗　本尊阿弥陀佛　慈覚大師の祝坐像一尺六寸八歩真如堂
鎮西派浄花院ふ属ス　本尊ふは其ふ初ハ板本会佛堂ふあり
當院古へ天台宗ふて開基ハ　亀ふ院の皇子四品兵部卿守良親王五辻宮と號ス當院の縁
起ふ後深草院の皇子出家し給ひて法蓮和尚とふのり即安居院五辻宮と寺と
記ス謬伝なり
あら人其後弘安十年園城寺の浄華坊證賢比丘盛の時天台を出て浄土ふ改宗
入吉水の流を禮阿上人ふ汲向阿上人と名を改鎮西四代の法孫當院の二世坂嗣ス
浄花院　坂開闢ス元吉ふ比ス伊勢守貞経が妻無庫頭貞固者院の本尊ふ示現坂給ふ
ふて貞経が家智を相續し當院の檀越と多く着ス所の重寶坂納ス　初ハ五辻大宮ふ
あり今兼開
院町と号ス其後京極今出川のふ移ス　大師帰朝の後ふ始めて坂堂ス真如堂ふ
浄篤院　浄花院ふ属ス開基ハ心誉上人天正年中の建之　本尊阿弥陀佛　慈覚の祝長一尺八寸佛之
西蓮寺　同街七本松の西ふあり浄土宗　本尊阿弥陀佛　慈覚の祝長一尺八寸佛之浄義佛
観音堂　浄華院ふ属ス　寺内ふあり本尊十一面観音ハ管神の作祝立像ス尺計佛ス金寶横次が
念持佛ス　洛陽観音巡の第廿八番ス
出世稲荷社　千本通下立賣の南二町ふあり山城初ハ内藤氏　公卿之亨保年中第
坂稲荷ス　坂稲荷糸苑町ふ賢帰して社坂再建ス出世の号右ふ
伝ふて由縁詳ふ非ス波近世霊験昌ふ
稲荷社ふ属ス

梅雨井　下長者町和泉町の西ふ側ふあり浄土宗黒谷ふ属ス本尊阿弥陀佛ハ聖徳太子の祝
人家田中氏の私撰ふあり仲夏入梅の節森雨降續き梅雨晴人とそ汲ミ
七日計の間此井より清泉張て出井幹坂越ス流を多て年ふよりて旱して雨
多ルを俗ふ空梅雨と号ス其歳ふ水浄泉常のごし

松林寺　智恵光院通出水の南ふあり浄土宗黒谷ふ属ス本尊阿弥陀佛ハ聖徳太子の祝
立像之尺計開基ハ清和上人天正年中の草創之由寺むしろう護念敬
坂ふ世業方坂日財家より寄附ありしふ本尊ふ上人の姿ふそ似ス
時折ハ霊言ありしふ本尊ふ上人の祝ふ時ふ上人の姿ふそ似ス
小女験ありふ世の人やとてうとふするの名あり

稲荷荒神社　坂慈通出水の南ふあり元祝神ハ大師の祝平安城開闢
明神同社ふまゐ稲荷荒神とも称ス後ふ稲荷
三宝寺と号し山科門堂ふ属ス

順興寺　丸太町通堀川の西ふあり浄土宗黒谷ふ属ス本尊阿弥陀佛　法日の祝立像ス尺ス
坂丸九丸と号ス父蓮如上人八十一歳の時出誕ありし謂ス　本尊ハ蓮如上人と大坂石山合戦の時顕如上人
行破名號　天正年中織田信長と本願寺攻ス時ふ櫻岸の大将坂菊
攻ス時ふ櫻岸の大将坂菊
撮別櫻岸の大将坂菊
也出家従上人坂助け身代と成て討死を不思議ふもひ鎧の袖ふ入し蓮如上人の書ス上
字の名号をうつし行破ハ味方ふ成て討死ス者ハ行破ハ敵ふ成て討死ス者ハ行破ハ敵ふ成て討死ス者ハ行破ハ敵

大學寮舊趾 拾芥抄曰二條の南二條坊門の小路生の西坊城の東とあり二水記曰應仁の乱後寥々として再へ永正年中ふるまひて基趾神泉苑乃西北条園の中ふありしとぞ荒廃して寛永年中酒井候拝領して候堂とする或が曰其後伏見へ移しぬと今わづかに一個の古井あり弘法大師堀さしめ給ひしと獨鈷水とて今ふかの名水ふあり

土橋稲荷社 二條通堀川の東鍛冶宗近ふ宅ふありし初ふ小鍛冶宗近ふ名ふあり金義ふ宅ふありけて社伝さまうまと土橋の号ハ中頃二條堀川の橋圮橋みて佛城遺事佛門勧ふあり

滋野井 拾芥抄曰中御門の北西洞院の西滋野井貞主卿の家とあり今按下立賣小川の西の方ふ名あり足ふんの

二條殿家 二條関白良實公又福光園殿下と号ハ旧趾烏丸通二條の小路二條殿町ふあり

和泉井 烏丸通中立賣ふあり今俗紅藍乃花紋絞ふそ繍帛紋染ふ紅色作方ふ勝景とされど高貴の調進多し足ふ名ふ水乃清潔ふふる具ふをあり花洛名産の第一ふぐし

少將井 烏丸通東川の小人家ふを平安舊圖ふ大炊御門の南東洞院の西惟喬親王乃家ふ井ふおる井とぞ俗ふ純言抄第紙ふ井ハおる井 橋井 后町の井 千貫の井 紀者ふくいひし 新撰ふもふ人をもりしふる世俗ふかの王子乃みこ一社少將井の上へあげまるとぞ

少將井天王社 車屋町通東川の小東側會所家乃奥ふあるおる井御旅町ふいまし祇園神輿三坐の内ふ迁ひ天正年中ふ四條京極今の御旅所ふ迁ひ抑此地ハ京極高辻大政所町ふ迁ひ天正年中ふ四條京極今の御旅所ふ迁ひ抑此地ハ京極沸霊八所の生土ふ依ふとも祇園會七日ふふ十四日まで系義をはじむ

伊勢御家 舊趾詳ふあらず

百首 祇園の神の奈盛鳥あて侍りける玉乃うてな大己貴命うち出神さけくおわしまさば又お將井ふ尼公紀者ふくいひし新撰ふもふ人をもりしふる世俗ふかの王子乃みこ一社少將井の上へあげまるとぞ

俊頼髄脳 云祇園法師讃岐前司為房卿車の尻ふ条てゆくふ二条と東洞院とふ伊勢ふ家ふそおりふるふの日の松乃あるふ誠ふ大さある松ふそちりうまそありしふる為房おやしを向ふれい祇園ふ云ひてやいふてふ車ふ乗ふがらふ伊勢ふむをび松ふぶりへ車ふふのふふると取りて

古今 お次ふに御ふしなれ家富しせふふりゆくはあそふふ 伊勢

暫今 ふ撥為くみ雪ふはふひふいつまふ花とまふとふあん 仝

祇園會鉾の児ら其町々の
當家より多くひ出し一同数日
本社へ参詣そろひの歳を以
して右乗ら寫しをき徒
後丁従者多く列して正一其
行粧威風凛々として究高貴
の往来の如し是えん
神の威徳ゆいち
そろえたるべし





右京

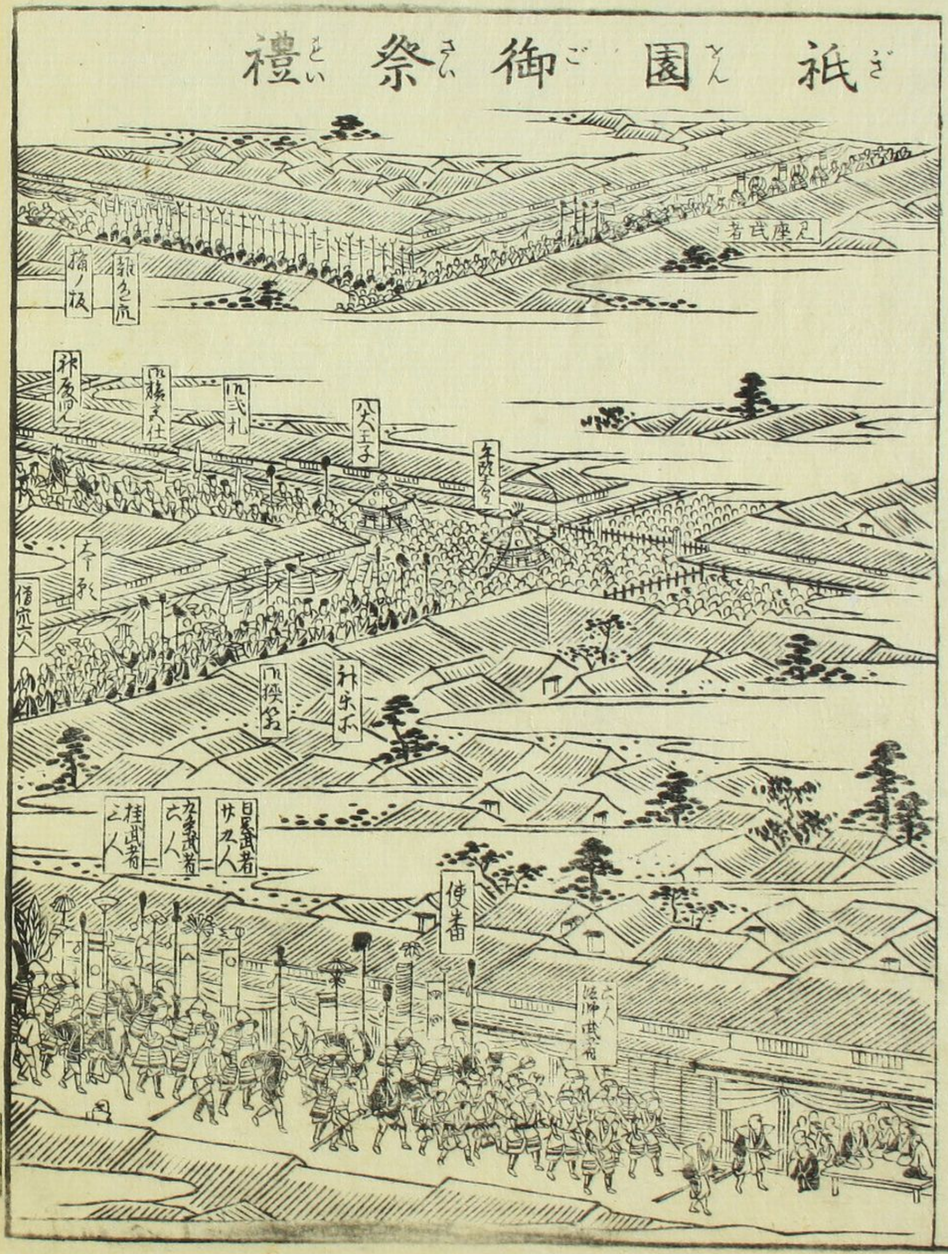
瑞雲山通玄寺曇華院　東洞院二條ふあり地名祇園牡丹祇園ともいふ
殿舘祇ともふうもと今ハ寺院初ハ近南にふあり高倉宮以仁親王の殿舎と申傳ハ定利左兵衛督直義寛正六年廿九日ふうつを季瓊日録ふ見へたり
女房ともふうもと代々姫宮尼公佛持職一條人禅家尼寺五山の裏一寺ふり
本尊観世音毎年十一月廿五日諸人の希請祇ゆゑ
三銘鐘　一鐘ふ二寺の銘ふり一延福寺云云于時延文丙申初冬下旬五日一妙覚寺云云于時応永第八暦辛巳閏正月日一金龍寺銘曰長享二年戊申季春廿日従一位富子誌之金龍寺云云○一説ふハ祇園社ふの鐘ともふうもと銘ふうその誌ともふうもと古鐘ハ寶庫ふ藏ふもふ
不動堂　姉小路東洞院の東ふあり延命院と号ふ本尊不動ふハ弘法大師の作ふうもと
二尺許真言宗隨心院ふ屬ふ
紫平卿家　高倉通二條坊門の南西側ふあり
今詳地をとゝめ免て紫水軒と称ふ
風雅集　ある人のもとゝより五条業平卿の家の梅祇ふ人うゑけるを
とてもとりて折りつゝ見ればいとゝ昔やむかしの宿の梅ぞも　前大僧正範憲

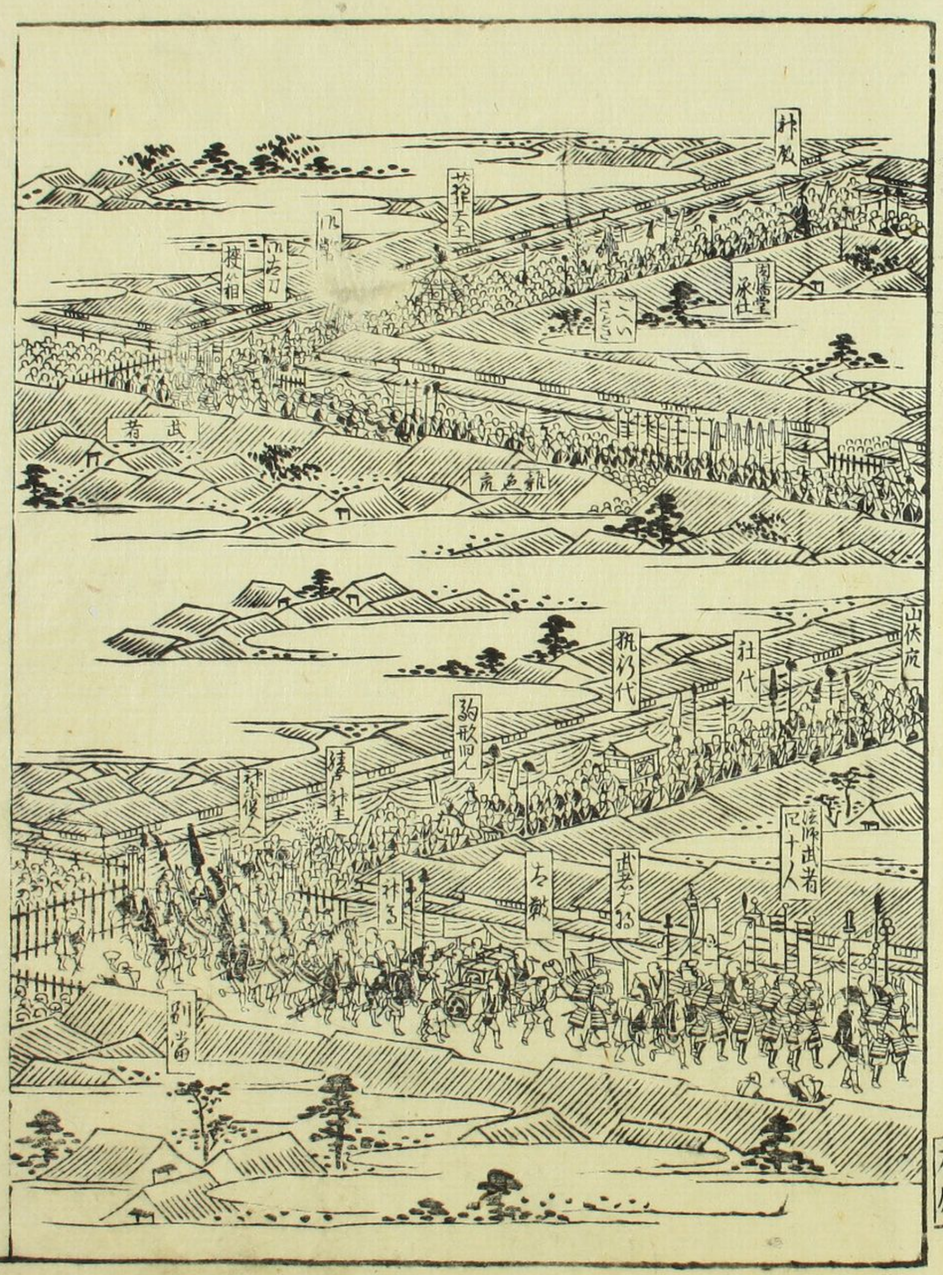
見へてもあかぬ色香ハ袂ふの長明無名抄云

業平の中将れ家ハ二條の坊門より南高倉より西ふたゝ少ふ殘ふり
さゝ折ふゝ常ふも似ぬともふらふふ後み

きのふともふうもと今日ともふうもと待ちしもみふ人ふもあらぬ
はいちしるく成て誠ふ古代ふ所と見へたり中須賜ふうもと
やけをして久しく右々れと世の末ふもふ人ふ
悪源太義平旧蹟　高倉通二條の北西側南の端ふあり東西二間計南北一間餘の空地之
初ハ高倉乃方ふ折垣ふあり近年塀を圍むふ所ふ區ふり分明ふ
平治物語の大意悪源太義朝の一男ふて忠胤義朝の人古今無
双の勇将之十三ふの時ふ馬頭ふ出張して討滅さんとゝを信頼ふさゝへらるゝ本意ふ
諸乃時攝列安階ふ出張して討滅さんとゝを信頼ふさゝへらるゝ本意ふ
ことけを具後父義朝乃命をうけて飛弾の國へ下りしが勢のはく来ふ
後ふ義朝長田ふ誅ふもふ人ふうもと皆ふ心ふうもと従ふ
ようハ親の歎清盛父子ふ討て恥辱ふ雪ぐんとふもふ人ふうもと従ふ
義平ふ家ふ仕ふ六郎景澄ふ者諫ふをめぐりて平家ふ
人ふうもと二條烏丸の家ふ居しめしふ義朝ふ
六波羅へ所人ふうもと二條烏丸の家ふ居しめしふ義朝ふ
絶を二百餘騎ふて討ふもふ人ふ
絶房ふ生捕らるゝ六條ふ斬ふもふ人具後清盛布引瀧詣の時
義平の霊雷ふありて経房を蹴殺しゝとゝ
○悪源太物語ふ案ふるふ高倉ふハ二町西之大内裏の作時ハ町條廣くして今の
高倉ふ具ふの屬れそふるふ案ふるふ高倉ふハ二町西之大内裏の作時ハ町條廣くして今の
○按ふるふ天明四年の春ふ地乃支配を
屋地主へ新へ番頭ふも
の樹ふり根ふ二條の地域ふ
なく枯ふり支配の人大ふ悔て六月ふ至つて家建る事遅して止ふ

祇園御祭禮





給主無州

いつてふ祇我ふうけてむとひこん兄弟多年の約とりこふ　定家

三條右大臣家

定方卿之拾芥抄云三條坊門の北
万里小路の西と云云
二条右大臣家乃屏風ふ

後土御門

春立てふ日ふまれいうちむまてていろまの人の聖ふこさこん　貫之

法泉寺

万里小路押小路の南虎石町東側ふあり東本願寺ふ属ス本尊阿弥陀佛ハ慈覚大師の作之像三尺許原ハ天台宗叡山の末寺ニて善法院角之坊と号し親鸞聖人乃舎弟深有僧都の住職しまふ所之舎兄聖人関東より上洛の後時々ハまふ来つて大乗易行乃法流被弘めふ依聖人濁鄙九十歳の時遷化しまふも此地より故ふ聖人誓跡の一旧と云本願寺傳記ふ曰禅房ハ長安馮翊の邊押小路の南万里小路の東と云云

法泉井

當寺乃庭中ふあり往昔親鸞聖人止住乃時ハ井坂堀しもふ水底ふ石ありこれと引揚ふ形虎乃形をふれさう故ふ聖人銘して虎石とふづく今東大谷祖廟乃上ふあり茶縁ふ委し町號ハ石より起る寺號此井より起ふ

願樂寺

旧町西側ふあり東本願寺ふ属ス初ハ江別条坊ふありて今乃場ふ在本寺ハ阿弥陀佛両基ハ佐々木家の支族青地左衛門尉頼方法躰し正願と号し蓮如上人の弟子となる三天儀

當寺乃什宝之寺保年中檀越ふ佐々木源慶安と云人ありて新坂善景祇側ふ在旋右旋乃運光祇形ふありて二天儀と号ふ慶安ハ後ふ改名して練達しまふ人本朝天文の奥儀を伝へ三天儀を本朝ふ渡しまふ人なり渾天儀ふよりかの祖佐々木技義の木像と共ふ当寺ふ寄附ス足頼樂寺の祖と同姓の田縁ありまふ永禄至の日二天儀を以て天文祇講説し諸人ふ見せむ慶安述作の書本朝天文志十巻あり世ふ行はる

卷之五

春立てふ日ふまれいうちむまてていろまの人の聖ふこさこん　貫之

飛鳥井

万里小路二條の南東側人家乃裏ふあり
風雅
あすとの井のまつ山ふいろ〳〵ねこもれる春の雨の夕暮　前参議為実

成範卿家

桜町中納言と号ス少納言信西の息男小督局の父之
長門本平家物語云
成範卿を桜町と中くる事ハ此卿桜を殊ふ愛し給ひて姉小路室町の宿所ふ数門乃見入より西東ハ町を数て垂本の桜を植通さしめ給へれ遠近人異名ふ仕町をば桜町とぞ中くるよしを聞給ふ花ふ心を移して花ハ陰ふ守て明さしまふ桜本中納言とも中さふく春を惜び桜を待し人多れ桜待中納言とぞ

添平盛衰記云

詔ふ仕へまつりし乃ち此町を植ふ給ふ桜ある事ふ依て桜町とぞ中くる人　天照御神ふ祈七日ふ籠ふ給ふ事ふ依ひ給ふ其験ありしふ二七日まで桜ふ名残を留給ふ事ふ感ひ給ふ

ちらやぬるあらし人神乃神されいふ花もよひとのびふるる

飛鳥井

万里小路二條の南東側人家乃裏ふあり
風雅
あすとの井のまつ山ふいろ〳〵ねこもれる春の雨の夕暮　前参議為実

空也堂
踊念佛

往も
空也の
痩も
ゑんまの
庭





石原

定家卿家　二條の小路より西万里小路より北側にあり
拾遺抄　為氏卿　按二條家と号し為相卿　按玲泉家と号すと云
百帖　宿うつせ都の内もさすひし花の人めまれなる庭の月かな　定家卿
定家卿てやどれる家ふたつ立てかくれありつつ
かのみのつゝ按て住る梅の木乃枝ふたつほ
風雅　忘れしの宿はむかしの春ながら主はかはりて梅ばかりこそ　永福門院内侍

佐竹草云
京極入道中納言ハ為家卿の号二條家と号すと云
京極入道中納言為家卿　按玲泉家と号すと云

白山社　白山通押小路の南ふあり京祇加賀國白山權現をむつ治承の比白山の大流
内裏ふ強訴の事ありてそのまつりとして山所ふ捨
玉ふり慶ふの剣ふ救人てこれ故神輿振とて山所ふ捨
當町故上白山姉小路の南て下白山と云
布袋藥師　白山通二條のふふあり本尊ハ聖徳太子の作坐像九寸五分實ハ菩
擬薬師とかさいの假名の字形をゑ誤さかてへとこゝろふつる剣此所も布袋町
ふん古へ大和玉宮田御廣願ふあり　按武帝の作時は京ふうつしを今天台宗判也院と号ス
紫式部家　京極正親町の南之そ何條校之正之え事
南京極の西頬今の東ふ向之ゝ云
常盤井　拾芥抄曰真言の南京極の西を流る常盤井そ大炊御門京極ふる所ふあり
名寄　名月もやとかは人も秋ふねとめて入道しおひぬ常盤井の水
後拾遺　やそ我ふそうる常盤井の水ふ着ま名ふあらねとも　少將内侍

天滿宮　花ノ木町通京極の西北側ふあり
菅家　高辻殿乃御鎮守ふあり
奉先の額　攝政九條殿下尚實公の御筆之
當社の門ふ掲ク
遣迎院　京極通中御霊乃小ふあり宗旨ハ西山善惠上人宗浩元年十一月廿二日入寂ス年十二歳
ゑまを四箇の本寺ふて開山善惠上人の作ふ安阿弥の仏之大師像　一尺七寸
本尊二尊佛　釋迦弥陀共ふ安阿弥の作之像之ゑ計遣迎の号ふあり
雲水井　客殿乃巽ふあり山林ふ井之
其内ふあり
光了山本禅寺　京極通石薬師御門の西ふあり法華宗勝劣派開之日陣上人應永
十二年ふ遠寺故建之ゝ同廿六年五月廿一日入寂ス八十一歳
上人像釋迦佛　金銅長一尺計日蓮上人の念持佛初ハ江刕ふ按の立像寺ふあり
後世そ玉ふうそ當寺ハ十六ヶ本寺の一員ふて旧地ハ四條堀川と
安禅寺　同街石薬師御門の西ふあり真言宗本尊愛染明王弘法大師慶ゑより隨身の
尊像之脇壇左不空羂索観音右不動尊共ふ弘法の作之ふて中興大僧都竟恵之
神明社　堀之内故荻下町ふあり京神保伊勢両宮行事官乃御鎮守ふて伊勢両宮
遥宮の時神器ふそゝく山家より遷進と
梶井天滿宮　京極中御霊の東　梶井御門跡乃御境内ふあり
初ハふの方御門ふの側ふあり近年ふ遷ふ
権帥ふ貶任ふゝまた時天台の座主法性坊尊意多年御交ふて深し
ゆへ能容とて御祓の硯ふ墨そ流さ玉ふ万緒の御名を改めて宇佐
ゐ人ハ北獄ふて御遺賜ふ御袈裟を賜ふ人と所望をとゞめさ玉ふ



松原通高倉東
民家裏
後成卿社

らん」畫像ふかの硯を取そへくく僧正へ佛硯ハ　梶井御門跡
の寶庫ふ傳ふ淸神像ハ淸境内の社ふ藏ふ　世ゐ菅家の淸神像多くハ
代わりて賞ぜらんハあるべう候
見性寺　二條川東ふあり淨土宗知恩院ふ屬ふ本尊阿弥陀佛　惠心の作
初ハ京極下ル靈の後ふあり寶永年中今ふうを
本願なる贈正重勝ハ織田信長公乃庶子にて村井春長軒ふ當そ
戒時直指人身見性成佛とて八字の旗を賜ハりとて八字の旗とうる天正十年
六月二日明智乱の時織田公并ふ
しく件の旗ハ土中ふ埋て見性寺とあらくハ十六年六月當ちふ於て
七回忌追善の爲豊臣左閣爲綸しめひ十七石の寺領を寄附せらる贈正
法名見性軒の墓當寺ふあり具子孫原田村井乃兩氏且越う
三福寺　二條川東ふあり淨土宗譽猿寺ふ屬ふ本尊阿弥陀佛　定朝乃作
初ハ京極二條ふあり開基了觀漸空上人　坐像二尺餘
夢見地藏　寺内ふ安置ふ定朝の作立像三尺ふす後一條院の后上東門院崇中ふ
生身の地藏ふ示現を蒙ふ其御像を作らしめ給ふる像と
前大納言爲世ふ祖寺ふて聽聞の次ふ奇瑞作の由述懐
墨載ふ名號ふけり弘をあらそひ守ふわれ孔雀浪
示證上人

聞名寺　二條川東ふあり時宗相別
安阿弥の作立像二尺計孝天皇塔ゐ内ふあり
秋野道場　寺内ふあり古へ南都ゐありて聖徳王乃草創之中比京都二條烏丸
法鏡山妙傳寺　日所東の端ふあり法華宗一致派興基ハ日意上人初ハ唐ふの学徒なり
改宗して甲州身延山の日朝上人の弟子と成それより祖師乃骨舎利
七面明神ハ都ふ勧請し九重乃身延山ふて奉寺城建立せり初ハ西洞院
綾小路今の妙傳町ふあり其後京極二條ゐうつる近来又ちふうに
日蓮上人像　坐像二尺初ハ上京興聖寺ふあり奉寺の六世日恵上人霊夢ゐ
依てゐ安置ゐ
大恩寺　日所ふある浄土宗　本尊阿弥陀佛　慈覚大師の作立像六尺八寸計方除本尊ゐ
百万遍ふ属ゐ　弘法大師の御作ふて四十八願巡の第一番之
開基ハ岌公天阿上人
教安寺　日所ゐある日宗　本尊阿弥陀佛　日作立像二尺八寸四十八体ありの内二十番之
知恩院ゐ属ゐ　開基ハ窓運法橋
空中山寂光寺　日所ふある法華宗勝劣派開基久遠院日剛上人初ハ室町近傍ふ在
其後京極二条ゐうつりて近世ゐちふうに
信行寺　日所ふある浄土宗　本尊阿弥陀佛　定朝の作立像三尺八寸計方除本尊ゐ
知恩院ふ属ゐ　願巡の第一番之開基願誉準公上人
要法寺　日所南の端ふある法華宗勝劣派初ハ醒井綾小路ふありしを近年ゐふらりを
其後京極二條ふうつし近世ゐふうに
みて智ゐ遷ゐ来ゐ故暁し所ゐ身ゐ
多ゐて即法義ゐ遷ゐ来ゐ故暁し所ゐ身ゐ初ハ天台宗
梵字三十六箇寺ありの康永
四年五月八日ふ化ゐ八十一歳
安養寺　京極四条坊門の南ふある浄土宗西ゐ派　本尊阿弥陀佛　定朝の作立像六尺ゐ
四十八願巡乃第四十六番之　安養寺と書ゐ
額ハ後水尾院の震筆之

本尊阿弥陀佛

去日の作立像六尺ゐ寸此本尊の蓮座八葉乃蓮華を倒ゐふ
乃ゐ相譲して倒蓮華とうんふ珍ゐ
弘法大師常乃ゐくそふ奇ゐ
ゐ表しうく女人引接乃相をあらわ
あり誓願至信ゐて阿弥陀仏
ゐれ足春日明神の應化うり
善導大師像

漢土よりの伝来之
長一尺二寸計

當寺初ハ大和國ふありて華墓院と号ゐ寛和年中ふ恵心僧都乃草創なり
二世ハ僧都の嫡安養尼として寺号ゐ改ゐ
霊告ふより洛陽ふ迁ゐ旧地ハ
倩ふ不動堂あり今乃華墓檀
し初り足畠山重忠の寄進
後ふ草院の天聴ふ達して勅
本尊阿弥陀佛

坐像一尺七寸　共ふ恵心僧都の作

當寺本尊ゐ面貌相好僧都一代制作之内陣壁板ふ浮ゐ九ふの相を畫く今殊
面ふ二十五菩薩ゐ画く是ゐ右地蔵ゐ
地蔵堂

寺内ふあり定朝乃作立像二尺霊験
奇異ふゐく枯今新之

鬼女舎利

當寺本尊ゐ拝ゐふ曽て
見ゐハ佛舎利ゐ授ゐ鬼ゐ相
求明舎利ゐ藏ゐ亦寺ふ伝来せり


七夕
梶葉流



淨教寺燈爐堂 京極通綾小路の北にあり浄土宗知恩院に属す四十八願巡の第四十二番堂と号す事は源平盛衰記に見えたり小松内府重盛公建立ありて洛東にありしが後世洛中東洞院高辻に移し天正年中又此地に移されしと鎮守は熊野三所権現之中興は立誉上人

本尊阿弥陀佛 毎日の花立像二尺計脇士は観音勢至なり佛龕内外の画圖 表具俱都て乃多分あり浄土宗一心院に属す

聖光寺 日街綾小路の北にあり四十八願巡の第四十二番之両基良阿上人

本尊阿弥陀佛 立像二尺計初は丹波国栗田郡篠村八幡宮乃佛本地佛之由天正年中良阿上人八幡宮の霊夢を蒙りて安置仕候と縁起に記す

清海曼陀羅 むかし蓮の糸にて織る清水寺の絵像を清海上人おがみ給ふと霊夢之旨都の繪師高天に命じ写しめ給ふ所の良阿上人毎日明神に詣しかの法眼の宅に宿しぬ

法然寺 京極五條坊門の北にあり四十八願巡の第四十二番之両基良阿上人

本尊圓光大師像 作自花立像二尺計蓮生法師の請に応じ花洛東吉水の禅房にて刻給ふ

勝久井　當寺の堂前ふあり細川兵部ぉ捕勝久ぅ
　家宅乃旧趾みて其井水之
當寺乃什物ふ親鸞聖人の筆十字名号後西院の宸翰六字九字乃名號　親鸞聖人
蓮如上人の遺骨秀吉公朝鮮發向乃軍詰ふり。之毎年第分の初夜ふ平を希
入道真佛上人の傳坂
講讀ぇ

南岩藏石不動　松原通麩屋町の角ふあり真言宗高野ふ明王院ぉ掌所之
寺記云當院初ハ法相宗ぉて持統帝乃御宇朱雀五年ぉ道觀大徳の草
創ぅり其比ハ山花松栢森々ぅく其中ぉ一堆の丘ふあり平安城開闢
の坂弘法大師此石佛坂出ぅりて安置しぅ人又詔のありく王城鎮護の
為四方ふ經王を石藏ふ収らふ此所も其一員ぉして南岩藏と称ぇ
其後天暦年中鴨川洪水の時堂舎も没流し荒廃ふ及ひしを二門
乃僧苔庭勅坂うけく再興をそれぅり年累を應仁乃乱後大ぉ類
廢し石像も塵芥乃中ふありしを天正年中聚樂城造営ぉ奇石坂多くあ
ぃ是ぉ以ぇ石特ぇ取出ぅ其時苔藪ぅる形石ありくく聚樂ふ入らる
ぃて其所後く形坂旅ぅて城中ぉ怪異多し故ぇ元乃地ふ返しくる是ぅり
後ハ小堂ぇ営てそぉ安置ぇ靈坂古今ふ新之
鐵輪塚　堺町通松原の南ふあり伝ぇ昔嫉妬深ぇ女ありぇ祈ぇて毎夜せの時希ぇあ
　氣疱てそぉ死を其霊坂集ぇて塚ぇ今ハ人家建續て塚詳ぁり候
大江公資家　東洞院通五條の小東側人家の裏ふ古ぇ高櫓ありぇ是其旧趾ありくく世人
　謬て源ぉお将乃宅ぇうくく町の名も今源氏町ぇ
袋物紙ぇ終因ハ古曾部ぅり多年花盛ふ上洛して大江公資ぅ五條東洞院の家ふ
宿ぇ件の家の前庭ふ樒樹ありぇ其花坂歌人為ぇぇぇ
御射山諏訪社　東洞院通六角乃南御射山町人家の奥ふあり信州諏訪明神ぉ勧請ぇ
　鎮坐乃年記詳ぁらず坂毎年七月廿七日祭式ぉ修ぇ

住心院　東洞院通二條の南ふあり天台宗修驗道ぅて聖護院の後家ぇ大僧正澄算
本尊毘沙門天　十里餘乃北立像四天八寸中頃大僧正晃譲一夕の夢ふ感乃方
　ぇ寶閣ありぇ時ぉ百千の蜡灯ぇ光明煌々ぇくて多門天現ぇ
る其翌日妙法院堯恕法親王ぅり金剛院僧正ふ命じて此像坂附属
しぅ人譲師義中のる新ぉ遠ぇくく拝領しぇ初ぇ摸刻奉ふ寺ぅ
安置し尊天告命ふよりぇく當院ふ迁し奉ぅ左ふ西佛師乃作ぇ人愛染明王坂脇士ぇく近年
来右ふ弘法大師の作ぇぉ伝ぇ堂舎再営ありぇ
　此ぉ以ぇ諸人絶ぇ

鼠突不動尊　六角堂の西ふ隣る住心院ふ属ぇ本尊不動ぇハ弘法大師の作坐像ぇ
大師堂　松原固幡堂の内西之坊ふあり密藏院醫王寺ぇ号ぇ近年堂宇建立ぁり
　て堂後面向ぉ額ぇ掲ぇる松窓藏ぇ書ぇ智積院動明僧正の筆之
弘法大師像　真言新義の宗祖興教大師の作坐像ぇ天餘舊ぇ在る像ハ紀列
　一条ふ根来寺の本尊之天正十一年兵火の時ふ寺乃学頭
中性院性盛上人ふ霊告ありて當寺ぇ迁ぇ年久しく客殿ふ安置し天明え
年今の堂内ふうつぇ真言新義中性院傳受乃松窓道昊當寺中興性盛上
人ぅ依来ぇて當院ぇ迁ぇ後水尾院ぇ拝ぇ愛せぇま勅しくく
今ぇ寺ぇにあり早咲椿　銘坂因幡堂ぇ称ぇ
用ひられしくを

いるはさくらふくんなの椿ぇ其名のごとく春の上ぇ早て花ぁをひめ
いみーさふふくんんなん代もさかんぇ玉椿ぇぇ椿や亜々ん　湘夕

比叡山の阿闍梨を師と
年毎の一茎小嶮路を
ふとゝ日々下山あり
美濃の大社を巡あるく
足ゑん天下安泰の祈祷
あるくん乞其
道條小僧人
せく阿闍梨汁
念珠を戴さ
結縁をるも
真如法性の
佛界ふいるの
きく話
うな亀ー





春よる
阿闍梨の
笠や
風薫る
泉重遠史

和歌所 皇后宮儀成卿五條室町乃旧第改良治乃所も為明卿伝領しもして新拾遺集撰ばれし所なり今の玉津嶋社儀成卿社も其殿内もうつしうつしなり

和名抄曰

新拾遺集 撰者為明勅撰之事治定貞治二年三月十一日内々被仰武家事

同十五日和哥所五條室町自武家以行忠三品被送綸旨於撰者云云

新玉津嶋社ふ北村季吟翁六年のあひだ住ゐ社記を自筆ふ書のこし今社家ふあり其文ふ曰 大ま入道殿乃家ハ五條室町のひがしふ微書記の地ふもとくんたる五条三位とやせし成り具そこふ彼卿こそ社祝祢ひすりもちうりと風情へしふ竟憲乃深秘抄ふハ等持院殿霊夢ふうりて社儀成卿の屋地ふ勅諚ふ職ふ補せしまし〳〵をかうる二権大僧都竟憲

我ゆそれ二代ふ住久しく玉津嶋

麻苑院殿御詠ふ

つもも二代人もみもそ馴ゐてことあそこく玉津嶋姫

これ等持院殿。寶筐院殿。鹿苑院殿頻阿。経賢。竟憲。公私共ふ三代ふくしおふをいふ也再興せしふ付てうたへ具ゆへ

つる世説ハそでめ後成卿乃祝ひ屋もうつふ土佐日記の抄と伊勢物語の拾穂抄ハ寛文

治六年三月廿二日新玉津嶋の社会ふてうりみや若葉集の拾穂抄ハ天和三年の序之

埋もれ宮居ふもてふあらしふ神のおりをそそる

今そ社おりハ海もそむしの文あれしも

同記のおふ季吟翁曰古抄を始め源氏物語拾鼻紙をはじめ先代集歌仙人ふほし給ふ具もうふ土佐日記の抄と伊勢物語の拾穂抄ハ寛文

乃そうめつつき浪水尾院の帝ふ二とせそのうりみや若葉集の拾穂抄ハ天和三年の序之

同記ふ季吟翁六十茶の時玉津嶋社ふ住しもようみそれ有り

神のうそをよそしの老の波玉津嶋ふもふ年をよ久方

季吟

社頭云俤潜の家通芭蕉翁ハ伊賀上野城主の家士松尾甚七帥之かの城を緑吟れ多祝嘗ふよりて冷泉家の門人とうりう季吟翁乃貴子とうりう玉七帥ハ使者とうしく時々新玉津嶋ふ住来し竟み季吟翁乃貴子とうりう玉道を俗授しかの翁乃勧メふよりて俤諧を初ふ其頃寛政紙辞して江府ふ赴き源川ふ芭蕉庵をいとうそく桃青と名ふ俳諧正風の一體成天下ふ弘む

元禄女社 高辻通室町の西小側人家の奥ふあり古へ此地ふそん女乃塚あり今小祠有り祭神氏の宅地と則今ふかめそ江戸狩野栄川の持地とを

享保拾壱己

長門萩司とうりう人の女あり高辻室町てうふを家ふかのうる者の面れ為の方うりう妻戸口ふそ常々人ふあひ物ふとうしく所うりる北七八計うりう年来いみしくうちうして矣ふうるをそ乃妻戸口ふそやうそ外うりる拙あうふうるをそ名部型ふいく矣ふそ例のうるふうくせんとそ車うる取おろし櫓うろくとしくうふいさうあひてうふいうおもしく家ふの肥うりうるをけうりうそあんやうそ人々走帰てりやとうふこの妻戸口ふなのせうふそあ伏ありうえをつれふ入てさ度ハなく城ふまうめて夕住うとみる祢ふみ初ふをうる当そ書戸口ふ初ふてうりいとねうふとうそみかを入せしそよ源ほふとうれ



六ツ半時念佛の鉦鼓七月
十五日ふる里卿とりおの〳〵
組を立て郡の町々よ
出盂蘭盆會魂家の
馳走ふ家々のおをふ
より切ひろる
近寄ハおどけ
狂言仕掛ゐて
衆人の目を悦ば
ひるも二俤をの間と
する夜りそ〳〵んを

さしみくいるうんへさかあくて呉てふあうんとおかをうさこうへやうて楽もを金をう
んとて妻戸口の板布をさぐらまきおろさんとしてそれをみてあろさんとしてふれと
まきそふ堰てたくくと掻つきそなるとうと高辻よりハ北室町よりハ西ゑる辻面ふ
六七間計の程ハ小家もあくてをの塚ありしうまふ塚のよう社
坂をおくりいそひとてあるさりにもいまふあるとなん

山王社 室町五條坊門山王町ふあり総持院と号ス古へハ慶玄の別院みて修教大師
坂本ム王を奉育宮ふ乃日ム所より七社の神供かとく調へて厳ふ烈とつ〇
まの天台座主の御所へ捧けをふしなお未の神供と称ス古へよりの本社へ献を
流例みて今ふ怠慢ふし
安ス世ふ庚申社と称ス近年安永のふ

午頭天王社 為九通高辻の小大政所町大善院の内ふあり古へ祇園の神輿所うり
行ふ普門僧都当社ふ再営ス

肉桂水 新町通六角の南人家の奥ふあり竟て湧泉みて寒暑ふ増減あく自
然と香気あり故ふ名とス

亀龍院 錦小路新町の西ふあり真言宗随心院ふ属ス初ハ淳和帝の御願みて
弘法大師の御作之地蔵尊を安ス毎年四月中の申日
到ス九百五十餘年間禄の災をし
市中ふ於ていまふ火ふ焼ス
額 日出受深明王と書ス仏殿の軒ふ掲ス
九條関白尚實公の御筆なり

本尊愛染明王 弘法大師の御作ふて長一尺ふ寸許金剛佛一尺ふ寸許亀甲ふ立せ
坐像一尺ふ寸計

亀薬師 寺内ふ安ス金剛佛一尺ふ寸許亀甲ふ立せ坐像一尺ふ寸計

道祖神社 新町通松原の角人家の裏ふあり今首途神と称ス或京程圖ふ五條の当
宇治拾遺曰
道命阿闍梨 侍大納言 道綱のおとそ兎ふ角ふくくと読ふそれおれ弘式ふ通ひふ経紙
ゆくくと読ふそれおれ弘式ふの巻ふみそて暁みふ成ほんとふ経ふ巻ふ
成てよふふ経ふ八巻ふみそて暁みふ成ほんとふ経ふ巻ふ乃志ふれをあれい
誰そこ向ふれおのまへふ経ふ西ハ院ふ不ル翁ふ地蔵経をおふしめふ事生々世々ふ
をれふくふとふれ道命曰法華経ふよふ事常のことふしもくいとふ
そふふれふ経ふの道祖の曰清くて読まて西ハ院ふ梵天帝釋をふてあふふて聴聞
せふふふへふ翁ふて近付まふて弟ふふふ
諸天も聴聞ふあふ陳ふ翁ふて弟ふふふ

平将門社 新町通の西四条の南高辻子ふあり天慶三年俵藤太秀郷等将門を滅し
頸を此所ふ梟しこと後世ふ伝ふ故ふ神田明神
と崇む其ふ空也上人ふふ建て空也供養の道場と号ス今ふ尚ふ念仏通しふ踊つて高辻
子と地名ふ呼ふ空也上人将門の亡霊ふまつりふ供養しふ石ふ建くりふ今
の下ふ厭まありとふん


都町踊
名ゆふるまで見さうな踊うた
豊後娘子うん


伊澤

飛梅 西明院高辻乃小萩大社おこあり圖ハ前編ニ見ユ拾芥抄ニ
天神御所高辻の北西明院の東ニ面セリ
菅家文章曰
東京宜風坊ニ有一家家之坤維有一廊廊之南極有一局局之開方綽ニ一丈餘投歩者進退倣行容身者超居側弗先是秀才進士出自此局者首尾畧計近百人故學者目此局爲龍門又号山陰亭以在小山之西也戸前近側ニ有一株梅一東去數歩有數竿竹毎至花時毎當風便可以優暢情性可以長養精神余爲秀才之間爲汝宿廬余即便移簟席以整之運書籍以安之嗟庳地勢狹隘也 贈太相國云云 菅朝文粹曰書齋記

誕生水 同社東の方誕生院の内ニあり昔時の井跡
誕浴之水再見澄清汲焉不竭
徳永卿其明 明和二年乙酉 東都烏石葛辰書ス 篆額

本尊阿弥陀佛 恵心の舎利寛平供奉の仏
立像二尺八寸計

大泉寺 五條の小西明院月見町ニあり
淨土宗知恩院ニ属ス
賢親上人住職ス 時寛永七年二月十四日の夜
當寺の中興ハ賢公上人二世賢親上人ニて其暁天ニ異香薫シ天華降リ多足ら花敷
又古ゟ生池楽の桑有故霊告あり
如来と称じ号故花降ふ
脱せり是衆生引接の相を現ぜぬれハ
勝地ニそ志ざしく居給ふあり

親鸞聖人花園舊跡 此地ハ
等おのくねを慕ひ路筋訪ふ
佛光寺繪詞傳曰
建暦二年九月開山 親鸞 聖人小別山階ニ一宇を草創ス興正寺と号ス後ニ真佛上人ニ
嫡弟平國香後嵐下野國司大内第之
息男之正鼎二年三月八日化ス五十歳

附属之柱 專修寺傳ニ附法相承之
そ淨定歴下の花園ハ勝地を則ち家ニ

帰京の後五条西明院殿 中畧
月見池 書院のおゝ前ニあり慈實公法水の月を
翫しまふ今門お故月見町と号ス

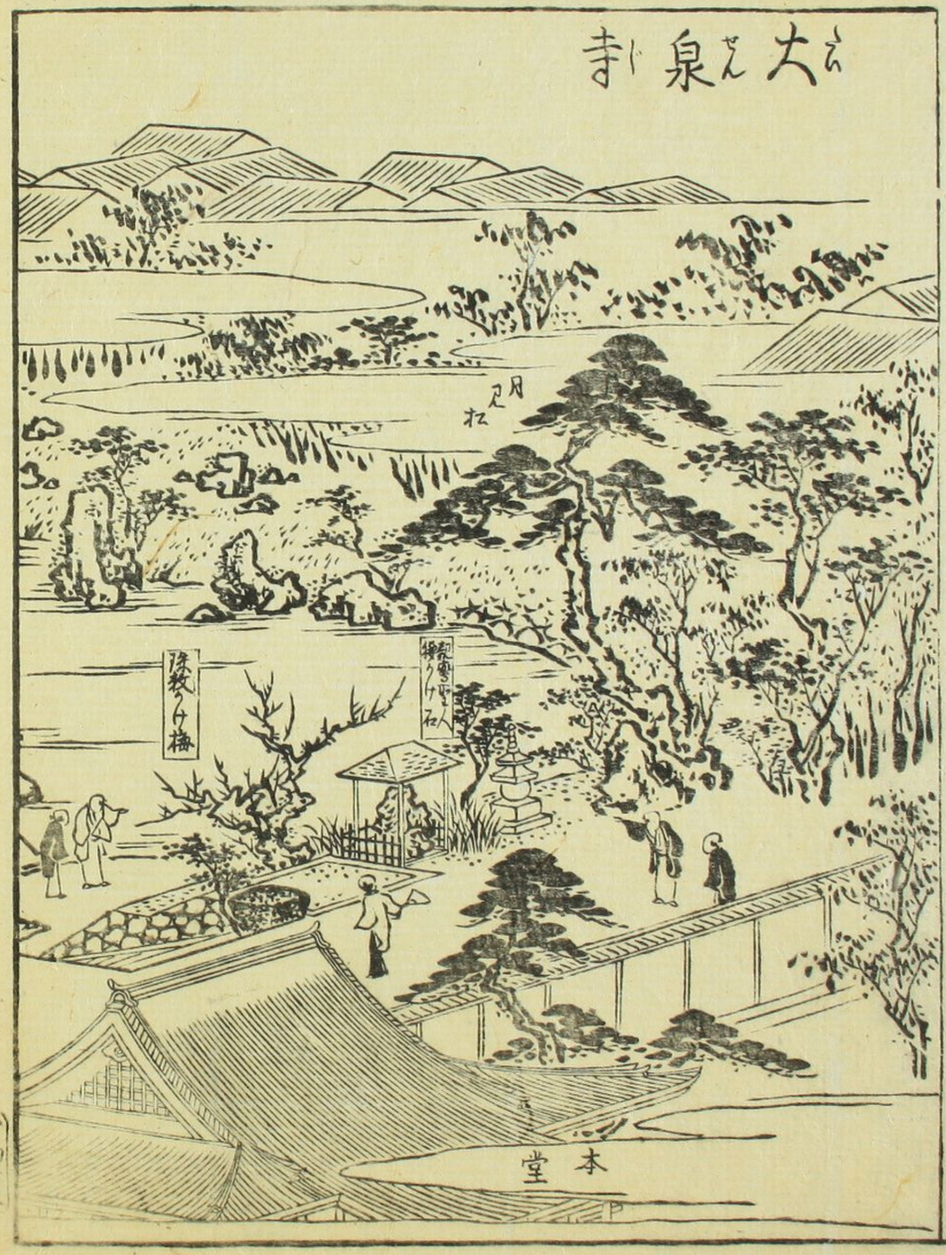
月見松 池の側ニ
あり

獅子巌 池の面ニあり形ハ獅子の蹲踞ふ
寺石之親雲聖人会談坂仕柱
ふるけ物ニ
長く延ふ花卉の清き芳ふ
物又ハ然所推況親雲聖人對坐の
嘆せふ其外覚信尼の教直筆
あり大泉の号ハ此地中ゟ清泉ふ
真向の弥陀法然上人自画の
あり其ゟ出て親雲聖人奮迅ふ一覧ふう

珠數掛梅 獅子石乃傍ニあり
古梅ふ枯枝
張く延ふ花卉の清き芳ふ
物又ハ然所推況親雲聖人對坐の
嘆せふ其外覚信尼の教直筆
あり大泉の号ハ此地中ゟ清泉ふ
真向の弥陀法然上人自画の
あり其ゟ出て親雲聖人奮迅ふ一覧ふう

大尊社 例祭八月廿八日ニ側ニ天祖宮
鎮坐ス此所の東後小路ニ町小例路次の奥ニ
躰ニ世俗武藏坊弁慶ニ


伊澤


大泉寺
月見松
腰掛け石
腹切り梅
本堂

人麿御霊社　醒井通高辻の南東側人家の奥ふかう初ハ只汗霊祠と唱へ（後成卿乃宅辺ゆゑ称ふ）祠ふるひ祭神を詳ならず（一説ニ猿田彦命と）按ずるに明和六年の春正二位上冷泉前大納言為村卿此一社の繋を務ひしを惜ひ（ふかくの祠破るゝを見て）修造して尊敬しける人町中も初てそれを称ふく社を綾造し祖俊成卿（歌神乃一社なりとそ）ふる村師よりも和歌揚人今町内ふ蔵む

一道院　堀川通五條坊門ふあり法華宗本園寺ニ属ス（囲基ハ吉祥院日喜上人中興ハ）一道院日法上人ノ本蔵寺と号ス

日蓮上人像　秘仏阿闍梨日法上人の開眼之霊之法皇乃勅願所なり（）

蛭子社　四條通油小路の西ニ軒町ふあり祠ふの井中ゟ出現を故ニ水閘蛭子と呼ふ

本行寺　醒井通綾小路の南ふあり法華宗妙覚寺ニ属ス（囲基日雄上人）

日蓮上人像　自然一尺八寸計古へハ房別誕生寺ふあり事ハ法華霊場記ニ見てゟ（霊験新）

相逢社　姉小路通新町の西高松神明の南人家の裏ふあり日吉山王の末社なり（）（根王社ゟ児童出遊んて其帰る所ともゟ）（草履放献しけれゟ）又依ふ迷子祖ともゟ呼ふ

迷子やゝ血ゟ啼かゝきた

児薬師　三條通油小路西ふあり音徳寺ニ（ハ）（昭あり）本ゟふ前頭一ツ（）

又旅社　三條通ゟ一町の角ふあり祭神午頭天王毎年六月十四日祇園會ふ社あり（遊放象ニ幣ニ三本放立て齊場とし）依ふて三基の神輿ふ所ニ鎮居

そんより烈を全して三條東へ（）
ゟ所あるゆゑふ號乃名あると

三寶寺　三條通大宮の西ふあり浄土宗百万遍ニ属ス（囲基ハ公上人文明十六年乃建立なり）

本尊三尊佛　阿弥陀ハ惹覚大師ノ作之（脇士観音勢士ハ安阿弥ノ作之）十一面観音　聖徳太子ノ作　立像尺尺

勢至菩薩　黄金佛立像　圓光大師像　自然坐像　地藏尊　恵心ノ作坐像（）

正運寺　四條坊門大宮の西ふあり浄土宗黒谷ニ属ス（囲基ハ添誉上人）

本尊阿弥陀佛　長谷寺ノ本ゟとハ本ハ（）

観音堂　寺内ふあり本ゟ十一面観音ハ（）

ゝそ洛陽巡の（）

集社　四條坊門千本通の東圓乃中ふあり古へハ社頭巍々ゝり今小祠とゟる

延喜式云　祇園神一座（）集神二座　新嘗（）

六月十五日甲午授従二位後院無位集神従五位下。日本紀畧云天慶二年九月四日奉贈（）

又謬て暑して癒神ゝして（）

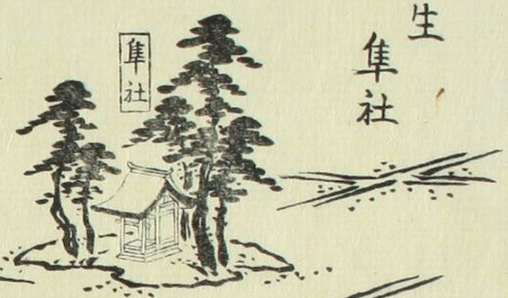
ゟ久土器ふ盛て祀供し次ゟ（）

再拝の謹啓ふ頭ふ傾けぬれでふ（）

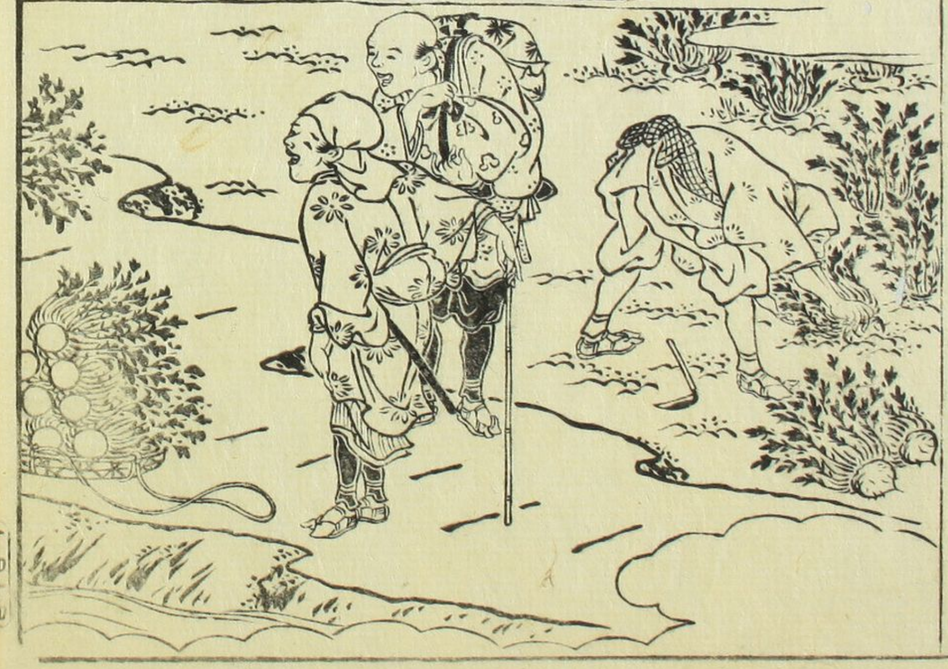
水蕊宮　四條の西千本乃東面の方圓の中ふあり老杉一株の本ふ祠を建ゟ土人午頭天王祀ゝ祀ゟ大内裏乃浄時ハ所ハ水蕊町ゟゝ一叢乃森ふあり或ハ祇園の圖ふ水蕊町ハ朱雀通の東四條乃南坊城の西後ふ落れ小ゝ（）

壬生

隼社



水葵谷系の名産と雖ども洛西壬生の地なれば味よく株小く葉のとり細くあり故に千筋水葵ともいふ一説に水葵よりとぞ畑より壬生菜ともいふ小茎ぐきの名小入ぐきに封じて廿日の遠路へをしこれを調ぬ水をそそけど





みえの風古の



休務寺　錦小路通大宮の西ふあり淨土宗西山派
（開基ハ貞空景林上人寛永十年の草創之
綾小路通大宮のあふあり淨土宗法然派
古ハ真言宗今宗の祖真安上人
聖徳寺
聖徳寺四十二歳尊像　作自化長一尺餘倚子ゟ寄て香爐板持ゟ
當寺ハ化事場所ゟ即佛寺ニおゐ
聚ゟ人化事場所ゟ即佛寺ニおゐ
新ゟて病患祈ゟ感應速ゟ
壬生鰐口鑼　壬生寺前綿ふへゟ例年二月大念佛の法會ふ堂おふ掲ル鑼名
附時ハ鰐口ハ東山殿の御寄附ゟ其銘の人此音ゟ風を悲憂を忘そて隨喜の志ゟ
物いてみふともまよ
壬生忠岑硯　壬生寺ふあり石ゟ
中比當寺の仏圖の中ゟ堀出ん
一夜天神　壬生寺の東ニ町計ふあり淨土宗知恩院ふ属ル古ハ八月梅龝實公乃別莊
小祠一基ハの霊祇勸請しゟ
月輪寺　壬生寺の東ニ町計ふあり淨土宗知恩院ふ属ル古ハ八月梅龝實公乃別莊
みて後寺記ゟ
本尊阿弥陀佛　慈覚大師の化立像一尺ゟ計　法然上人像　慈實公の化坐像一尺ゟ計　龝實公影　作自化ゟり
歸命院　旧所ハ歸命院町ふあり淨土宗知恩院ニ属ル
開基ハ雄運社文誉上人慶長年中の草創ゟり
本尊阿弥陀佛　運慶の化圖院ゟ
歸命の名ニ寄附ゟ小児ニ香湯を与ふ業かいちゟくしく
世ニ名ゟし

中堂寺　松原通大宮の西ニ町計ふあり淨土宗西山派
古ハ天台宗慈覚大師の開基ゟりしそ
長圓寺　旧所中堂寺のあふ隣ゟ淨土宗百万遍知恩院ニ属ル
開基ハ大誉法巌和尚慶長十二年の草創之
観音堂　本堂の小ニあり本尊観世音ハ恵心僧都の化立像三尺計一條院御宇
長徳四年の冬瘧病大ふ流行て児童死ゟる事限ゟし
親鸞と人側隠ゟゟて人ゟ即殿嶽
楞厳院乃僧都恵心ふこれ祝級ゟし
しゟば正観音祝彫刻しゟるそれゟり年久しく殿ふふあり
止て諸人安抜しゟるそれゟり年久しく殿ふふあり
寺大誉上人ふ請ゟ寺ゟ即ち霊告ゟりて殿峯ふ史ゟける像祝威深しゟ
うゟ安座ゟ洛陽記ゟめぐりの
第廿四番ゟ次

本圓寺方丈　當寺の圖前縁ふへゟう方丈の額ハ妙法華院ゟ隷ゟ書しゟ
乃畫圖ハ永徳の筆ゟし所ハ瑞龍院殿の寄附ゟて障子等
大和中納言秀吉卿の館ふゟりし祝
人磨社　祝化補しゟ
方丈の小ニあり初ハ紀貫之の
祝化補しゟ其後荒廃しゟ
其後再営しゟ
足利尊氏公神祠祝縁倉ゟうへ
号ハ貞和年當寺祝縁倉ゟうへ
尊氏公神祠祝再営しゟ

行水の柳ふ泣む根をとゝそろゟむゟ乃人丸の塚　尊氏

○茶亭　方丈の裏ふあり　古田織部のぬゝ
○雛形石燈爐　方丈の庭ふあり
○假腫手洗鉢　旧所ふあり
○駒繋松　旧所ふあり尊氏公駒を繋ゟしゟそ
○馬駐場　大客殿の東萩の中ふそ長四十間計
左右ふ封疆あり尊氏公競ゟおゟし所之

○夕顔曼陀羅　日蓮上人の筆本圀寺寶一の什寶なり表具蜀錦みて　○狗畫　宋巖宗帝
夕顔の浮文あり尊氏公陣羽織の切うりこれを
○大黒堂　本堂の小ふあり大黒天立像二尺計寺記曰天正三年中ふ老翁此像を持
来る貫くんぬ其宿所夜々明日得べしと告ぐ其夜老翁又夢に告ふ求むる老翁乃曰貧ハ
夕り其後再び来る依故ふ茅神の像化しおハ
ここく北野の松乃下住居宿を葺れかげの茅原

○亀井　本堂のあふあり上古ハ○是より本圀寺塔頭の名蹟故記ス
田面清水こゝ
○福大明神社　勧持院ふあり系祢紀貫之の霊みつく衣冠の本像之天文五年
七月社を焼失の時祢像故佐家ふうけしかれハ時々怪異を
再び當院ふうけし社故建て安置ス上洛の時祢祠故修補し
祢ふる翁しるい迫年祠故修補し
織田右楽祢系の像　○左閻部屋　吉祥院ふあり豊臣秀吉公いまゝ處ハ
可ふうこゝそ賞ハ　ハしく木下藤吉郎の祢ふ寓居し
こゝ飯故烹調ふいし所こゝそ俗ふ左閻部屋と呼ふ秀吉公の肖像を
○松蔭井　持珠院ふあり　足ハ位冠持笏祢鈸の像と初ハ方おふ
○妙見堂　本圀寺塔頭の名蹟故記ス
○四観松　東南ふあり　開眼ハ一段低ふ永法院ふあり祢所開基日重上人の
求法院縁堂の　○金吾中納言秀秋廟　安置ス秀秋卿ハ木下肥後守
家定乃五男みて初ハ秀吉公乃養子こ成後ふ小早川隆景乃家督こ次慶長
八年九一歳みて早逝し瑞雲院殿秀巖日詮と号ス
○烏帽子石　真如院ふあり形烏帽子乃こ〻寺記曰永禄三年の春頃刻み
よりこく本圀寺みて天下安全乃祈禱故修ふも其石足小

義昭公春詣し寺内故巡覧し石を愛しふひ其外妾了寺内の什寶故
押取ふ宿坊真如院日奥廣圓諫訴をこゝ用ひふらず薄る事度々
及べど日奥故追院しる故こゝ捨ふひ乃其夜も内狐驚ひ起ッく
義昭公故恐懼しむ感こもれ即石の祟之ふ故ふ石故等也胸ふ重て若しはしも祟
祟免除也ハ日奥故帰院之石故稲荷明神こ祟むゑしと俗を以く
祈しふ忽怪異退散し　○真如水　旧院こあり寺号ハ井
公の身ふ安泰乃う　より記ス
○古井尊像　日蓮上人の彫坐像八寸計旧院ふあり永禄年中日奥上人八像大宮乃
かしう故俗返もふ譲経れ聲あり之れ故奥ふ法華経の霊文
ありて不思議ふ思ひけかしうの祢ふ之立ふりこれを古井ありて其水度ふ用ゆ
即井中故捜しふる高祖乃ふ像を得ふり故ふ持し帰ふて其像を堂
義昭公甚ふ尊信しふ今の古井稲荷社ふうまふ
今の古井稲荷社ふうまふ　○辨財天社　旧院ふあり弘阿弥ふ
當院ふ祢むえ禄六年正月元朝ふ白羽矢一筋乃ふ
くく此社ふ来ふ其翌年も同年ふ
立像一尺六寸計寛文四年の冬雪乃日此神像故將来ふく售ね當院乃
三世日球上人此儘故報んとそふふ老翁行方を晦しく雪ふ足跡ふし
不思議ふ思ひ大佛師法眼康継ふ命ふ康継ふ曰是を傳教
大師乃死みて後百古祥院ふ鎮坐しふる像故是もふふ康継ふ曰是を傳教
故ふ七面大明神ふ厳像ふ祢天ふる像故也ふ
同天女乃姿ふふて七面明神ふ崇む　○松永弾正久秀塔　本圀寺墓所の小
祢松永久秀ふ當寺乃大檀那みしく南向ふあり
あくしふる石故等久秀寄附ふ故ふ墓所ふ今ふ於く此二十坊より北の方塔頭二十坊の寺地之墓所の封境
悟の銘ふ久寺殿祐雪大居士と彫ふる故ふ墓所ふ今ふ於く此二十坊より北ふ配ふ
松永彈正墓公天正五丁丑年十月十日とあり


沸新堂
扇折


扇折る
やさく
沸新堂
涼しき
風箱
箱入みさく
班帋

三善清行家　五條堀川あり　くそ詳あり後そんぢ行の撰歴考あり
文章多くの本朝文粋に載るを其上閻易暦術算道の達人之
寛平延喜乃二朝に仕へて詩賦を善にし淨藏貴所の父なり
今昔物語云
宰相三善清行と云人ありけり五條堀川の辺に荒たる舊家を
人住そして久しく成ぬれば此家絃貫取て吉日を
もとめ遷りぬるに其夜子の刻ばかりに清氣ある女の扇さし
帰ぬとおぼしくて妻戸を叩ける音しけり答ければ
ふ塗籠に入ぬるを聞て宰相そと起ぬれば騒にして居たる有明の月影ほのかに差
のぞき攜着たる公羽文挿ふして跪て公羽申さく年来住候ひつる
所をかく居さし免給へと禁うんが為ふ参りたる宰相の曰汝が恨と頗當ら
ざることれ人の家を領とる事ハ代々次第ふ伝ふる物汝ハ人の
住ふく居ん所を都る人を勘しても住ぬべし押居て領とる事捨て疾々
汝ハ必天の責蒙るべんと次第ふ其道理申ゆむべしと宣へば翁を頭を低く
涙をそゝくと流し元ぬつる道ある人を悩し候ふ事を翁ら

所為ふ非ず一両小童部の候ふ帳をして自然住る事ふや候らん大
学寮の南門乃東脇ふある人住る地の候ふ其所へ疾渡らんハ如何と申せば
宰相のたまふ速ふ一族引連と其所へ渡れ其所翁嘻しがふ小童部とも早々
我ふ随ふく退候へと聲高くいへば姿ハ見えずくも四五十人計のまうん颯
とぞ答ける暫ありてふ家絃ふみしく
三若清行の家ふ伝し化物の画をゐたく粗ぬ板よ多る
化物の姫松翁もありそけそもそうし清行が家　斑竹
堀川御所源義経館　東ハ油小路西ハ堀川を限りハ楓ハ香を揚梅を植る而ふ
堀川御所といへ今醒井通五條の南西一町東西一町の間之原ふ地ハ後白川法皇の御所
の形ふ庭石遣し家あり是ふる殿舎の内之下寺町延壽寺乃本ある今和佛も
法皇ふる信しうしく殿内ふありし文治の比判官義経も
南ふ楼町とりふあり文治の比判官義経
○百練抄ふ文治二年十月十七日今夜子の刻ばかりふ堀川を限りハ楓ハ香を揚梅を植る而ふ
より堀寄て夜討の企あり義経忽ふ会釈を襲来る勇士みな〳〵逃散ぬ
○平家物語ハ坂本ふ土佐坊昌俊ふ手勢ふ十余騎判官乃宿所六条堀川乃
所へ押寄ぜ油小路ふる義ハをどうぐしねり
○一説ふ今の本圀寺方丈の地堀川御所所ふ
直義の下知状ふ六条法華堂屋敷ハ南ハ森の裏田を堺北ハ五條今通を堺東
ハ御所の旧地堀川ハ旧堀堺下畧法華堂ハ今の本圀寺之今通ハ松原通之旧堀ハ
堀川みち御所の要害ふ設る所ふ

源頼義家　旧記油小路尼女牛町（今仏光寺町と改む）伊勢守頼義ノ宅地ノ内ニ在リ初ハ茸町ニ在リ奥州ヲ征伐シ給ヒテ後永承五年ヨリ奥州ニ下ラレ前九年後三年ノ合戦ヲ遂ケ給ヒ宗任貞任ヲ誅シ給ヒテ後ハ生捕ニシ上洛シ給ヒ貞任ハ生ラレ給ヒテ後ハ斬ラレ給ヒシ事ハ人ノ知ル所ナリ

長明発心集云

伊豫守源頼義ハ若キヨリ罪ヲノミ作リ給ヒケレバ弥モ懺悔ノ心ヲ発シ給ヒケル事モ無カリケリ

小向ノ尼ト云ケル女房ノ許ニ通ヒ給ヒケルニ尼ノ夫ノ兵ノ道ニ心ヲ発シテ後ハ此ノ女房ヲ教ヘ導キ給ヒケルニ頼義ノ命ヲ惜ミ給ハヌ事ヲ歎キ給ヒケレバ尼ノ云ケルハ地獄ノ報ヒ疑ヒ有ルマジキ事ニテ候ヘドモ我ガ為ニ罪ヲ造リ給ヒテ後ノ世ヲ歎キ


天明燈


稲荷御通夜桃燈
御神燈
天明燈

國姓爺寓居西六條本願寺の地（或人曰初は所の本願寺乃
侯人七里氏の宅地と國姓爺の寛永元年日本に生まれ名を七
里氏の子孫仕し武術を諸方の名士に傳授し壯年に至って中華に渡って大明九世
の王乃錦の旗を自筆乃書翰を添て酬恩の
永七里名小贈ぼ仕奇器西本願寺の寶庫に收めおくしと一說に淺世仕錦の旗
城功名の寺めぐりの寺めぐりや嬉今一二ヶ所修繕しくくこと
清閩海鄭居仲著國姓爺鄭成功傳其大意に曰
夫國姓爺の忠義膽の人と姓の鄭氏初の名の森字の木と二文を
大明泉州の太守に仕て名を芝龍字を飛黃と號し一年落魄して漂
泊乃身と成日本へ渡て倭婦松娶て國姓爺を產父芝龍に從ひ
大明へ歸國し厥后日本へ金幣松貽て壯年の時國姓爺を遣し風
儀整秀叡儻にして大志あるを常に東に向て其母を戀む金陵の術士國
姓爺の相を觀て足奇男にして骨相凡に非ざる命世乃雄才之其に福王江左に
立てえ弘光と改元芝龍を南安伯に封ぜ明の大祖九代の孫唐王を迎
福州に即位しえを隆武と改む國姓爺唐王に謁し王乃姓朱の字を賜
鄭成功と号し御営中軍都督に封じ尚方の劍を賜り海外國姓と稱ぜ
日本乃母を迎て大明永曆二年滿洲府城を陷し同三年韃靼と合戰し同五年
數奇策を用て閩澳に二十餘萬の兵を率て韃靼を攻る事數度に同十年に
泉州に於て大に合戰を遂に延平王招討大將軍國姓爺鄭成功と號し大明永曆
十六年日本寛文二年に當る臺灣に於て軍務の勞に沒す永曆十九年武え年より紀ス
成功乃鄭經父の志を繼て父子三世二十九年の間明王を補佐を
明室乃遺臣にて吾亂臣賊子に非を故に國姓爺及び長子鄭經と共に南
安縣に於て禮を以て歸葬し給ふ事の如しと
源頼光館 西六條七條の小路正寺の
勸めに依て退治して頼光の家に四天王と共に外の容ふ人の
ある鬼神通故淨て計策を以て若鬼神通故淨て計策を以て
ふん抔頼光公に六孫王の嫡孫にて
命を下して軍勢を以て滅えや當家の
にふん画圖の一巻に書しとんへくろ
猪隈社 初は西本願寺玄関門のお西側下間刑部卿參ありし地に祠太今はあり

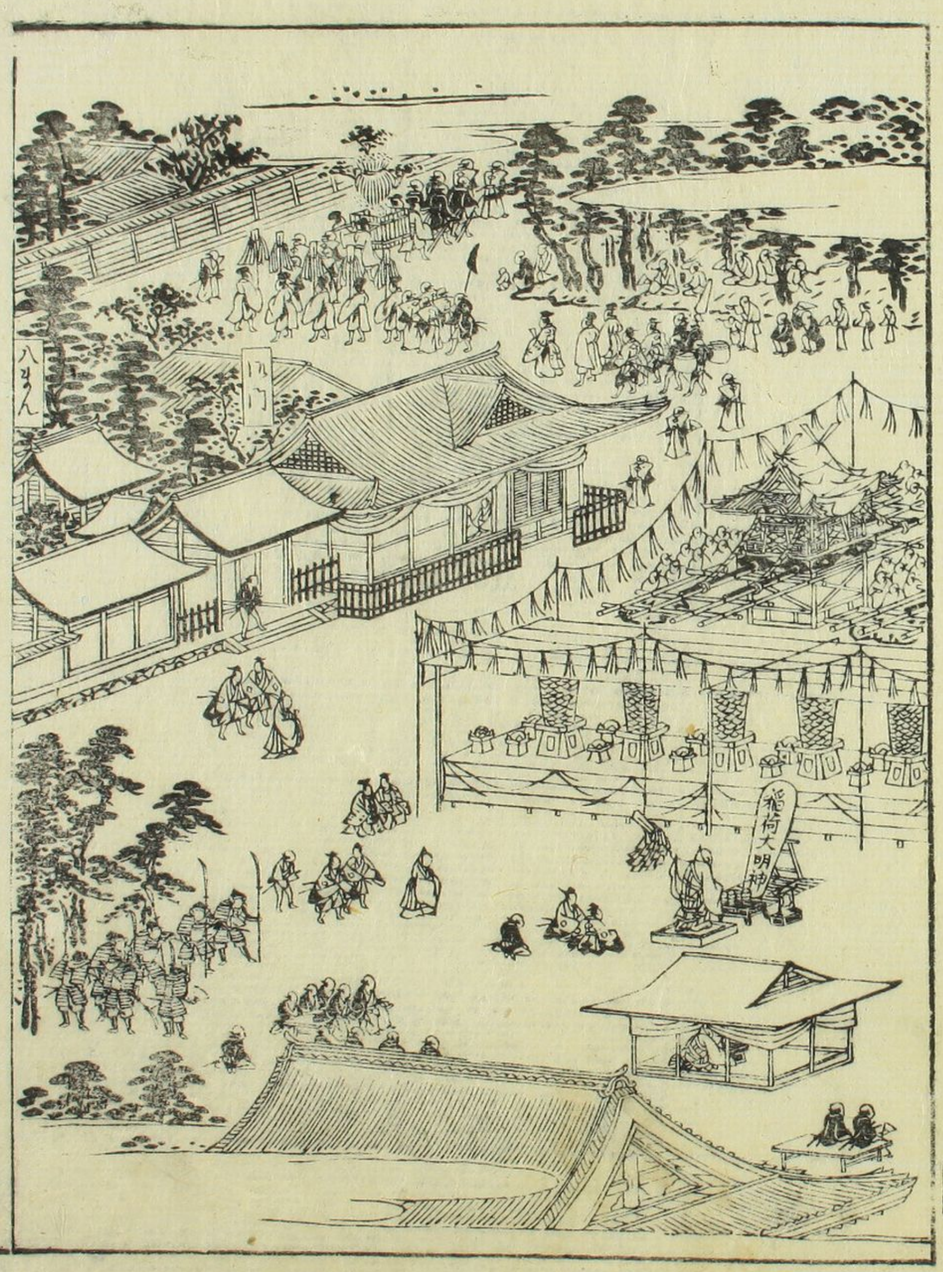
藪内
茶亭
庭中
之
圖

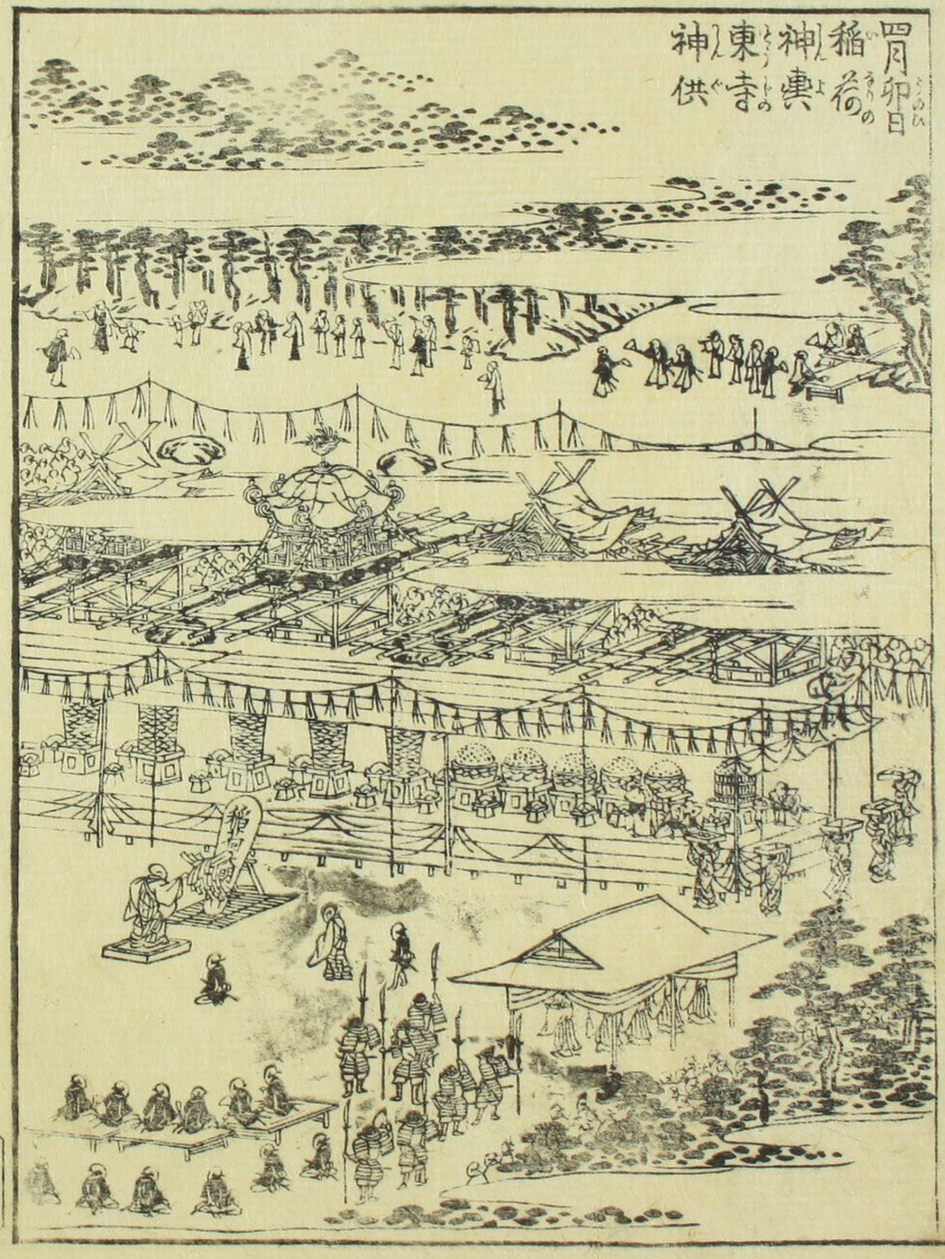
一 古田織部の改めお座
二 利休せとうろ
三 井
四 文覚石
五 文珠石
六 利休戸ざし石
七 東山殿之燈ろう



八 利生三尺袖石
九 侍合
十 松甲金花ぶち
土 珍法觀音礎
圭 該古堂
圭 路次口
面 雪隠




八幡宮
八門
稲荷大明神


罔卯日
稲荷の神輿東寺の神供

高瀬川



高瀬川は角倉
内裏御修理の
材木を運ふ
ために
掘らせ
嵐山の磯よ
り二条
の内裏まで同名
あつてあれ代々の
勅撰ふ和歌多く
あつめられ



羅城門　大内裏の南面の正門にて朱雀通（今の千本通）と九條大路（今の九條通）との交叉点の南方に在りしこと日本紀に見ゆ。天武天皇八年十一月都城の都の羅城を築くことを詔し、持統天皇三年十二月藤原の都の羅城の名義に関する詔あり。其の詳細は延喜式に見ゆ。羅城の外の大城は唐書地理志に曰く「通鑑唐憲宗紀に曰く「不務時克羅城胡三省の註に曰く「通鑑唐憲宗紀に曰く「築京師羅城」と。唐書高祖本紀に曰く「羅郭起観千九門」と。又朝鮮の制度に曰く「羅城の外郭の垂仗」と。羅城の名義諸書皆同じ。羅城の門は外郭の門なり。

小世継物語曰

柏原の御門　桓武天皇

いとしく侘しほく都を御覧ぜまほしくおぼしめしけるに、柏原の御門の前なる平の宮地を見給ひて、ここにこそ都を遷さるべきなれと、御心ときめきせさせ給ひけるとぞ。

門今もありとぞ。

て初のぬく門のおもかげ遷を止て御覧ぜまほしくおぼしめしけるに、柏原の御門の前なる平の宮地を見給ひて、ここにこそ都を遷さるべきなれと、御心ときめきせさせ給ひけるとぞ。

まろる立を召て侘ろ〳〵まうでゝ侘ろ〳〵まうでゝ侘ろ〳〵まうでゝ

嵯峨を奏へ押通て田畠と南小の隙も
なく民屋軒を並へ都の如し歯科を召
て充満の昔よりも倍へぬまてと京都のそ
まぐるしく洛中洛外の堺を末代を相定へし郡乃旧記をうつすと伝ふれとも歯科
畏て稗さまてろく極まれる天を延暦二年奈良の京より長岡の京へ遷りて十年あて
當国葛野郡宇多村とうつせる小田神相應の地とやかうて愛宕郡の内まても十
三年ふ京へ極まれる油小路を中小路と改めて條里を割り東の京極を小川鴨口西の九條を
と九重の都と号せり油小路より東弘仁迄西右迄と中古京も長安京洛陽と号ひ
さしが内裏の代々おいて替ることなせども洛中洛外の堺も遷ることなし法住院常徳
院の時代ろ八条義や庵もすしが戦場と成ぬ分て万民迷惑し都ゟ往来うたゑ
ゟ自愛宕ゟ京迄ゟ少し秀ゟ台ゟ向ふ洛中洛外を定へしと號大名ふ仰付られ
東西ふ土堤をたゝ世ふ拙一切の寺院洛中ふ充満て五家ふ並びたゝ法寺院ふ仰付
法るゟ京極ゟ一町東へゟ出て小川鴨口ゟ西ふ條ゟ迄ふ町屋ふ仰付ろ西ふ條ゟ迄ふ町屋ふ仰付ろ
補遺都名所圖會平安城之巻 畢